

看護学教育研究共同利用拠点  
千葉大学大学院看護学研究科

# 看護実践研究指導センター年報

平成29年度



CHIBA UNIVERSITY

## 巻頭言

看護実践研究指導センター(以下、センター)は、昭和 57 年に設置され、看護系大学や地域の多様な保健医療福祉機関のご協力と参画、および多分野の方々のご支援を受けながら、看護学および看護職に対する社会的要請と看護系大学の状況に即して、全国の看護学教育研究者および実践者のニーズに応えるように事業を改変し活動してきました。

平成 22 年度に文部科学大臣より「看護学教育研究共同利用拠点 (以下、拠点)」として認定され、平成 27 年 4 月 1 日から再認定を受けて (平成 31 年度まで)、第 2 期の活動を開始しました。

平成 29 年度の年報により事業報告を致しますとともに、心からお礼申し上げます。

平成 29 年度は平成 28 年度に続いて 2 つの事業に取り組みました。一つは、「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発」(文部科学省平成 27-29 年度医療人養成受託事業)です。この事業の目的は、各看護系大学が教育成果としての学生の卒業時到達目標の達成に向けて、着実に教育の質改善を継続し、独自性を発揮するために有効な、各大学の多様性を前提とした評価方法を提言することです。最終年度に際し、「自大学の卒業時到達目標」の達成状況の評価では、各大学の自律的な教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) の一環として、自大学に適した評価方法を決定し、実施することが重要であり、卒業時到達目標 2011 等の外部指針の活用により、CQI に取り組みながら自大学について理解を深める必要があることを提言しました。

もう一つは「看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデルの開発と活用推進」(平成 28-31 年度)です。この事業の目的は、看護系大学が自律的に教育の質を保証するための手がかりとして CQI モデルを開発し、看護系大学の相互支援あるいは個別支援の体制を構築することです。看護系大学が 260 を超えて社会的影響が増す中で、専門職大学の新設等、多様性がさらに拡大しています。各大学の自律的な CQI が社会的重要課題といえます。平成 29 年度は、全国の看護系大学の CQI の実態を学会、看護学教育ワークショップにて報告し、CQI 支援として、各大学への個別支援、FD マザーマップ®支援データベースの改築、FD マザーマップ®活用ガイド ver.3 の発刊を行いました。

これら二つの事業と連繋して、研修事業(看護学教育ワークショップ、看護学教育指導者研修、国公立大学病院副看護部長研修、看護管理者研修)および共同研究を行い、さらに看護系大学のニーズに対応して、新たに看護系大学 FD 企画者研修を企画・実施しました。

自大学の状況を理解する上で他大学の状況に関する情報が必要であり、また、地域および大学の状況に即した看護職の養成および看護学の多様な分野の拠点形成には、先進的な取組みのモデル化が有用と考えます。センターでは、さらに各事業と情報集約・発信の機能を強化して、大学間の相互支援、ネットワーク形成と多様な拠点形成を推進したいと考えています。

看護学教育研究に関わる全国の皆様により活用され、貢献し、結果的に資金面でも、より自律に向かうように、中村伸枝看護学研究科長を中心に、今後もセンター教員と看護学研究科教員が協力して、拠点およびセンターの機能強化に努めますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

センター長 吉本 照子



# 目次

## 巻頭言

### I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

1. 設置概要	1
2. 事業概要	1
3. 各研究部における研究内容	2
4. 看護実践研究指導センター 活用実績	4
5. スタッフ紹介	5

### II. 平成 29 年度事業報告

1. 年間トピック	7
2. 看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発と活用推進プロジェクト	8
1. 看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトの概要	
2. 平成 29 年度の取り組み	
3. センターホームページリニューアル	
4. FD マザーマップ®支援データベース改築・ FD マザーマップ®活用ガイド ver. 3 の発刊	
5. CQI モデル試案の方向性	
3. 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業	18
看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究	
—学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発—	
1) 研究 I. 全国調査	
2) 研究 2-1 後ろ向き事例研究	
3) 研究 2-2 支援ニーズ WEB 調査	
4) 研究 2-3 前向き事例研究	
5) 平成 29 年度看護学教育ワークショップの実施	
6) 事業成果の統合・専門家会議を経た提言・パンフレットの完成	
4. 共同研究	23
■共同研究 1 教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える 看護学教育向け FD コンテンツの開発と評価	23
■共同研究 2 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究	25
■共同研究 3 公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発	27
■共同研究 4 FD コンテンツ開発 (国際) —10 年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流—	29
■共同研究 5 合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけた FD プログラム開発	31

5. 研修事業 .....	33
1) 国公立大学病院副看護部長研修 .....	33
2) 看護管理者研修 .....	40
3) 看護学教育指導者研修 .....	43
4) 看護学教育ワークショップ .....	46
5) 看護系大学 FD 企画者研修 .....	52

### Ⅲ. 資料

1. 教育・研究活動実績 .....	57
2. 職員配置 .....	68
3. 看護実践研究指導センター運営協議会記録 .....	69
4. 看護実践研究指導センター運営委員会記録 .....	72
5. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程 .....	75

# I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

## 1. 設置概要

昭和50年代半ばにおいて、看護学は、医学と密接な連携を保ちつつ、独自の教育研究分野を確立しつつあったが、高齢化社会の進展及び医療資源の効率的運用への社会的要請の増大傾向の中にあり、特に生涯を通ずる継続的な看護教育のあり方、高齢化社会に対応した老人看護のあり方、病院組織の複雑化等に対応した看護管理のあり方についての実践的な研究及び指導体制の確立がせまられていた。

このため、昭和57年4月1日千葉大学看護学部にて、これらの実践的課題に対応するとともに、国立大学の教員その他の者で、この分野の研究に従事する者にも利用させ、併せて看護職員の指導的立場にある者及び看護教員に対して生涯教育の一環としての研修を行うため、全国共同利用施設として看護学部附属看護実践研究指導センターが設置された。

設置当初は、継続看護研究部、ケア開発研究部、看護管理研究部の3研究部から構成されていたが、より柔軟で時代に即した活動が展開できるよう、平成19年4月からは政策・教育開発研究部、ケア開発研究部の2研究部構成となり活動している。その後、平成21年度からは看護学研究科が部局化されたことに伴い、看護実践研究指導センターも研究科附属となった。

また、平成22年度より、看護学分野では全国唯一の「看護学教育研究共同利用拠点」として文部科学大臣より認定を受け（平成27年度より再認定）、各事業を通じて、看護系大学および地域社会の保健医療福祉機関のネットワークを促進する拠点として活動している。

## 2. 事業概要

本センターは、事業として次のことを行っている。

### (1) 看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデル開発と活用推進 (H28-31年度)

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」を推進し、地域で人々のLife（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善（CQI: Continuous Quality Improvement）モデルを開発し、全国の看護系大学の自律的・持続的期の強化を支援する。

### (2) 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業 (H27-29年度)

（調査研究等テーマ：学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発）

看護系大学が、「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（到達目標2011）」を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な、多様性を前提とした評価方法の提言を目指す。

### (3) 共同研究

個人又は複数の共同研究員と千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員が研究プロジェクトを形成し、看護固有の機能を追及する看護学の実践的分野に関する調査研究を行う。

### (4) 国公立大学病院副看護部長研修

日本の医療が直面している現状を理解し、大学病院の上級管理者として現在直面している課題

の中から問題を認識して構造的に分析し、問題解決に結びつく計画案を作成し、実践・検証することを通して看護管理者としての実践能力を高め、看護の充実を図る。

#### (5)看護管理者研修

大学病院の特殊性にかんがみ、医療機関としての機能を十分に発揮し、看護の充実及び看護業務の円滑化を図るため、看護師長等看護管理者に対し看護管理上必要な知識を習得させ、その資質の向上を図り、大学病院における看護管理の改善に資することを目的とする。

#### (6)看護学教育指導者研修

臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者として必要な実践的指導能力を高め、臨地における看護学教育の充実を図ることを目的とする。

#### (7)看護学教育ワークショップ

看護系大学間の情報共有と相互支援のネットワークを構築し、参加者が自大学の CQI を推進するための FD の場として企画・運営している。平成 29 年度は、「看護学教育の自律的・継続的質改善 (CQI) の戦略を練る」をテーマとして実施した。

#### (8)看護系大学 FD 企画者研修

組織分析を通して自大学の課題を特定し、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合った体系的な FD を企画・実施・評価できる FD 企画者 (FDer) としての能力を身につけることを目的とする。

### 3. 各研究部における研究内容

#### (1)ケア開発研究部

本研究部は、専任教員・特任研究員・システム管理学専攻大学院生・研究生・実践センター共同研究員により構成されている。実践センター事業として、看護学教育研究共同利用拠点の特別経費による教育関係共同実施分「看護学教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) モデルの開発と活用促進」(H28～31 年度)、文部科学省委託事業「医療人養成の在り方に関する調査研究」(H27～29 年度) についてのプロジェクト研究に継続して取り組み、その一環として看護学教育ワークショップの企画実施および報告書を編纂した。FD マザーマップ開発に関する FD コンテンツ開発にも引き続き取り組み、成果物を順次センターホームページに公開し、学会および報告書として公表し活用促進に尽力した。センターの独自事業である共同研究 (ELNEC ほか)、大学病院副看護部長研修その他 SD および FD 研修プロジェクト成果もホームページおよび学会発表等を通して公表し、実践と教育研究をつなぐ活動を継続している。本研究科協定校のソウル国立大学 (韓国)、コンケン大学 (タイ王国) と連携し、看護学教育における FD および次世代のグローバル人材育成にむけた国際共同発表を国際学会で実施し、継続的に学内・国内・国際的研究の拠点づくりを行っている。

野地有子教授は、研究代表者として第 1 期平成 25～28 年度 JSPS 科研基盤 (A) 「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」を終了し引き続き、第 2 期平成 29～33 年度 JSPS 科研基盤 (A) 「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」を開始した。診療ガイドライン開発の世界的リーダー Dr. Holger Schünemann 教授

(マックマスター大学)をはじめ国内外から講師を招聘し、日本医療機能評価機構 Minds との共催にて、キックオフ国際シンポジウムを開催した。また研究成果を社会実装につなげるためのプラットフォームとして、アプリの開発を行っている (<http://ancc.link/app>)。協定校サンディエゴ大学 (米国) との科研共同研究は、UAE ドバイで開催された国際学会に招聘され講演を行った。平成 29 年度厚生労働省老人保健事業推進補助金「認知症対応型共同生活介護における栄養管理のあり方に関する調査研究事業」研究委員として、全国調査と政策提言を行った。本学医学部附属病院臨床栄養部との共同研究である千葉 NCM (Nutrition Care and Management) 研究会を主催し、病院と地域をつなぐ栄養ケアマネジメントのシステムづくりの研究を継続した。文化看護国際共同研究センター推進室で発行している英文ジャーナルの編集委員を務めた。

黒田久美子准教授は、実践センターでの研究の他に「認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族の援助指針の精練と実装化」(基盤研究 C) (研究代表者)・「糖尿病患者セルフケア能力測定ツールを活用した外来患者用 ICT 看護システムの開発」(基盤研究 B) (研究分担者)・「高齢者ケアの継続・連携に関する質指標開発とシステム構築」(基盤研究 A) (研究分担者) に取り組んでいる。その他、アジア開発銀行老人看護プロジェクトの協力者として、中国医科大学第一附属病院で研修立案の基盤となる理論・評価に関する講義を行った。

## (2) 政策・教育開発研究部

政策・教育開発研究部では、看護職者の役割の拡大や看護職者に寄せられる社会的ニーズにより効果的に応えるための政策研究や、看護基礎教育と連動させた看護職者の生涯にわたる教育・人材・キャリア開発のための研究を行っている。

平成 29 年度は、看護実践研究指導センターが特別経費により平成 28 年度より取り組んでいる「看護学教育の継続的質改善 (CQI:Continuous Quality Improvement) モデル開発と活用促進プロジェクト」及び「文部科学省 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業 看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発」の両事業に中核的にかかわり、その研究成果を発表した。

和住淑子教授は、自身が研究代表者を務める科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 「看護職の生涯にわたるキャリア発達を支援する体系的研修プログラムの構築」を進めつつ、同時並行で看護高等教育政策に関する研究を進め、その成果を学会発表した。この他、現場の看護師らと共に、看護実践上の課題を解明し解決するための看護実践研究を重ねた。

銭淑君准教授は、研究代表者として、平成 25-27 年度に実施した科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「看護学生の『生活パターンと自覚症状の関係チャート』及び生活改善プロトコルの開発」の研究成果として異なった大学間の対象者について、地域性の特徴を含める比較分析を国際学会で発表した。また、平成 25-28 年度に実施した科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) の研究分担者として、「高度先進医療施設における東洋医学系統の診療科における外来看護の構築」の研究成果を発表した。さらに、他の科学研究費の研究分担者として、学生の実践事例から統合実習における看護実践能力と評価基準について、研究成果の発表を行った。この他、「自己の看護実践体験に対する看護学生のリフレクションの特徴」も発表した。また、エンドオブライフにおける文化的ケア-文化看護学会第 8 回学術集会 分科会 I において、国立成功大学 (台湾) の実践の現状及び地域とのネットワークシステムについて発表を行った。

## 4. 看護実践研究指導センター 活用実績

当センターは昭和 57 年の設置以来、様々な研修・研究事業に取り組んできた。拠点と認定された平成 22 年度以降の研修利用者数は、総計 2061 人である。



図 1 平成 22 年から平成 29 度の研修受講者数

表 1 総計の内訳

看護学教育指導者研修	288 人
看護教育ワークショップ	796 人
国公立大学病院副看護部長研修	189 人
看護管理者研修	707 人
FD 企画者研修	10 人
FD 支援データベース登録	39 大学
看護系大学への講師派遣・コンサルテーション	32 人

## 5. スタッフ紹介

### ◇センター長



氏 名 吉本 照子 (よしもと てるこ)  
職 名 教授  
学 位 博士 (保健学)  
所 属 センター長 (看護実践研究指導センター)  
兼 地域看護システム管理学 (看護システム管理学専攻)

多様なケアの場の看護管理者が自律的なケア人材を育成し、自組織の機能の発揮と地域ケアのシステム化を推進しながら、保健医療福祉制度の維持・発展に貢献することをめざして、研究・教育を行っています。

### ◇ケア開発研究部



氏 名 野地 有子 (のじ ありこ)  
職 名 教授  
学 位 博士 (保健学)  
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)  
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)  
博士後期課程 (看護管理学)

様々な価値観の変換と多様性 (ダイバーシティ) に直面している社会において、看護職の役割は人々のつながりを通して益々重要になってきています。新しい看護提供システムの研究と教育から、グローバル・リーダーの育成に取り組みます。



氏 名 黒田 (垣本) 久美子 (くろだ (かきもと) くみこ)  
職 名 准教授  
学 位 博士 (看護学)  
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)  
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)

「教育－研究－実践をつなぐ」をキーワードに教育研究をすすめたいと考えています。関心のある方は是非、ご連絡をお待ちしております。



氏 名 赤沼 智子 (あかぬま ともこ)  
職 名 講師  
学 位 修士 (教育学)  
所 属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)

◇政策・教育開発研究部



氏名 和住 淑子 (わずみ よしこ)  
職名 教授  
学位 博士 (看護学)  
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)  
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

個々の看護職者が、看護の専門性を発揮しつつ組織に貢献していくことができるような教育体制づくり、政策形成過程について、実践と研究を重ねています。課題を共有できる全国の看護職者、看護教員と積極的に連携したいと考えています。



氏名 銭 淑君 (せん しゅくくん)  
職名 准教授  
学位 博士 (看護学)  
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)  
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

中国の「太極図」は自然界の現象を、陰・陽両立の状態に相互変化するという万物の動きの法則を表します。看護にもこのような法則が適用すると考えられ、日々の生活、研究を通じて、その意味を検証したいと思います。

◇特任教員



氏名 吉田 澄恵 (よしだ すみえ)  
職名 特任准教授  
学位 博士 (看護学)  
所属 看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発と活用推進 (看護実践研究指導センター)

国がめざす医療提供体制の構築の課題を解決し、地域で人々の Life (生命・生活・人生) を支える看護職の輩出のために必要な看護学教育の継続的質改善 (CQI : Continuous Quality Improvement) モデルを開発する事業に取り組んでいます。



## 2. 看護学教育の継続的質改善（CQI : Continuous Quality Improvement） モデル開発と活用推進プロジェクト（以下、看護学教育 CQI モデル開発プロジェクト）

### 1. 看護学教育 CQI モデル開発プロジェクトの概要

「看護学教育の継続的質改善（CQI : Continuous Quality Improvement）モデルの開発と活用推進」（平成 28-31 年度）プロジェクトは、文部科学省認定 看護学教育研究共同利用拠点の事業として、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間協働活用の促進」（平成 23-27 年度）プロジェクトを継続発展させた事業として、取り組んでいるものである。

平成 28 年度から実施している FD コンサルテーションを含む個別 CQI 支援、平成 28 年度末に実施した全国調査、平成 28 年度看護学教育ワークショップ等を踏まえ、平 29 年度は、事業の説明図(図 1)と、年次計画(表 2)に示すように、新たに「ネットワーク型 CQI 拠点形成」の構想を加えて、本プロジェクトを遂行している。

#### 【目的・目標】

国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を推進し、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善（CQI : Continuous Quality Improvement）モデルを開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。

#### プロジェクトの全体図

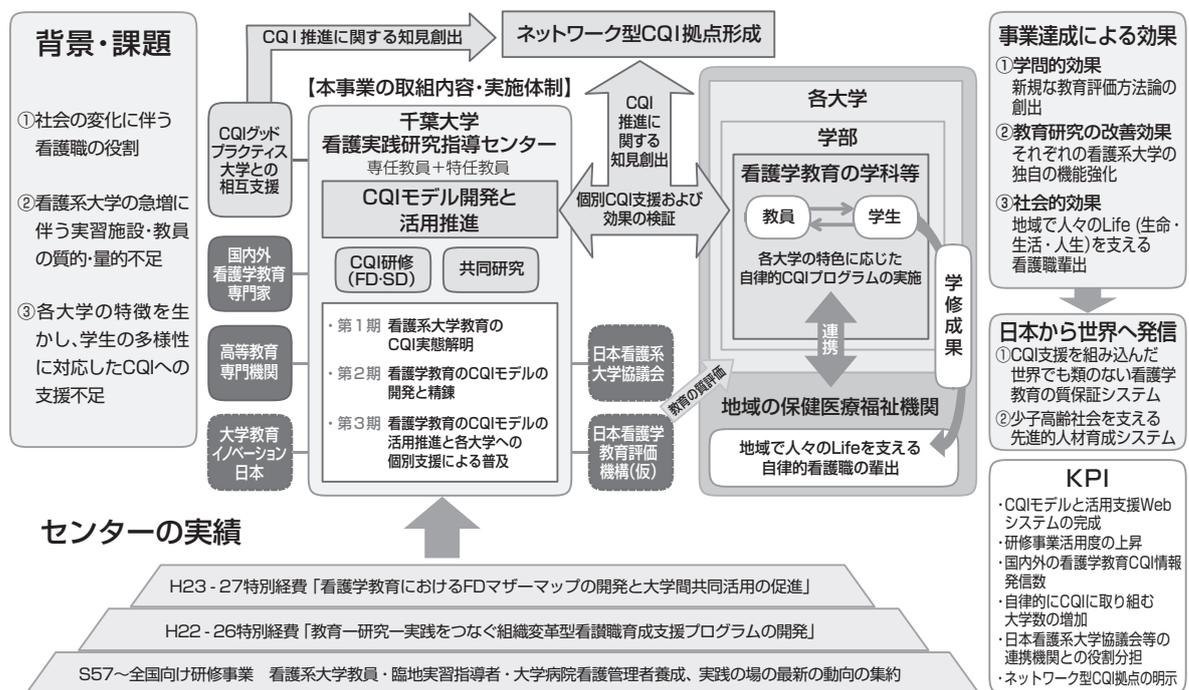


図2 看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進 事業概要の説明図 (平成 29 年度修正)

## 【年次計画】

表2 看護学教育の持続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進 年次計画(平成29年度修正)

		平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
事業フェーズ		第1期:看護系大学教育のCQI実態解明		第2期:看護学教育CQIモデル開発	第3期:CQIモデルの活用推進
実施内容	CQIモデル開発	●CQI全国調査 ●CQI事例研究準備	●CQI全国調査 ●CQI事例研究 ●CQIモデル試案作成	●CQIモデルの活用説明会実施 ●活用協力校の募集、選定、ルール決定と共有 ●CQIモデルの精練・完成	●CQIモデル活用支援の効果検証 ●CQI推進者研修プログラムの開発 ●全国CQI調査の実施と分析
	CQI支援	各大学個別CQI支援			
		●FDマザーマップ活用の効果検証	●各大学要請対応型CQI支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援	●CQIモデル活用型CQI支援 ●各大学要請対応型CQI支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援	●CQIモデル活用型CQI支援 ●各大学要請対応型CQI支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援
		●CQI研修事業 ●CQIコンテンツ開発	CQI研修の拡充+FD&SDコンテンツ開発		●CQIモデル活用型CQI支援 ●各大学要請対応型CQI支援 ●FDマザーマップ活用型FD支援
	ネットワーク型CQI相互支援体制の確立 事業評価と発信		看護系大学FD企画者研修(7月~3月) 看護学教育ワークショップ(10月)	看護系大学FD企画者研修(7月~3月) 看護学教育ワークショップ(10月)	看護系大学FD企画者研修(7月~3月) 看護学教育ワークショップ(10月)

## 2. 平成29年度の取り組み

平成29年度は、第1期:看護学教育CQIモデル開発のための実態解明から、第2期:看護学教育CQIモデル開発に事業フェーズを移行できるように取り組んだ。まず、平成28年度末にデータ収集した全国調査の結果をまとめて公表し、平成29年度看護学教育ワークショップを開催した。また、個別FDコンサルテーション含む各大学への個別CQI支援を継続するとともに、CQI研修事業の拡充として、新たに看護系大学FD企画者研修を企画・実施・評価した。また、相互支援体制の確立に向けて、FDマザーマップ®支援データベースを改築し、FDマザーマップ®活用ガイド ver.3を発刊した。加えて、平成27~29年度に行った「文部科学省・大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業・看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究」の成果も統合し、年度末に、看護学教育のCQIモデル試案(以下、CQIモデル試案)作成に向けた方向性について確認した。

事業評価に基づく情報発信としては、センターホームページをリニューアルし、日本看護系大学協議会(JANPU)や、日本看護学教育評価機構(仮称)との連携を検討した。また、国内外のCQI活動の情報集約に努め、大学イノベーション日本のフォーラムに参加し、同団体の加盟組織紹介パンフレットからも情報発信を行った。

看護学教育ワークショップおよび看護系大学FD企画者研修、文部科学省受託研究については、本年報の別項目に記載するため、以下に、全国調査と個別CQI支援、センターホームページリニューアル、FDマザーマップ®支援データベース改築・FDマザーマップ®活用ガイド ver.3の発刊、CQIモデル試案の方向性について記載する。

### (1) CQI全国調査

本プロジェクトの第1期:看護系大学教育のCQI実態解明として、「大学における看護学教育の継続的質改善(CQI)活動と背景要因に関する研究」プロジェクトを組織し、全国調査を実施した。調査の概略を下記に示す。

## [目的]

本調査の目的は、看護系各大学が、自大学の看護学基礎教育課程における看護学教育の継続的質改善（CQI :Continuous Quality Improvement）の状況をつかみ、具体的な改善活動を自律的に実行することを推進するモデル（看護学教育 CQI モデル）を開発するために、教育の CQI を推進する立場にある教員が、自大学で実施している多様な教育の質改善活動のうち、継続的な質改善活動（看護学教育 CQI 活動）ととらえている活動と背景要因を明らかにすることである。

## [用語の定義]

- 看護学教育 CQI 活動:看護系大学の教員が実施している自大学の看護学基礎教育課程における教育の質改善活動のうち、組織的に行っており、回答者が、継続的な質改善につながる取り組みと判断しているものをいう。
- 背景要因：看護学教育 CQI 活動の推進に関連する要因を指す。

## [対象]

日本看護系大学協議会（JANPU）会員校 254 校（省庁立含む）の看護学の管理責任者と責任者が CQI 推進教員とした者 4 名 1270 名

[期間] 平成 29 年 2 月 20 日～4 月 11 日

## [方法]

依頼文と封緘した個別アカウントを郵送し、連結不可能化した専用 web で調査した。調査票は、平成 28 年 10 月に実施した看護学教育ワークショップにおける参加大学 70 大学の報告をもとに、国公立大学の CQI を推進する教員を交えた専門家会議を経て作成した。調査項目は、看護学教育 CQI 活動、背景要因、属性で構成した。各項目の単純集計後、管理責任者と CQI 推進教員の回答の相違について分析した（ $\chi$  二乗検定）。また、看護学教育の CQI 活動の促進要因の回答については、取り組み群、一部取り組み群の 2 群に分け、 $\chi$  二乗検定した。自由記載は、内容の類似性から記述を整理した。

## [主な結果および考察]

回収数は、185 名（責任者 37 名、CQI 推進者 148 名）で、回収率 14.6%であった。管理責任者は、1 大学 1 名で依頼しているため、少なくとも 254 大学中 37 大学の回答があったとすると、大学数でも回収率 14.6%であった。設置主体別にみた回答者の属性について、看護系大学全国と比較したが、有意差はなかった。

CQI 活動の実態については、＜大学を取り巻く関係者に対して行う CQI 活動＞、＜在学生・卒業生に対して行う活動＞、＜教員が行う CQI 活動＞の 3 カテゴリ 27 項目について、それぞれの実施の有無と CQI に活用されているかどうかを調査した。その結果、＜大学を取り巻く関係者に対する CQI 活動＞では、「実習機関・施設等へのヒヤリングや協議」が 90.3%で最も多く実施され、79.5% CQI に活用されていた。加えて、この項目は、CQI 推進教員の方が、責任者よりも有意に CQI に活用しているとしていた。＜在学生・卒業生に対して行う CQI 活動＞では、「在学生による個別の授業評価」が 95.7%の実施で、74.1% CQI に活用されていた。＜教員が行う CQI 活動＞では、「教育の改善に焦点をあてた FD 研修」、「自己点検・自己評価の実施」、「カリキュラム編成・科目設計の見直し」が多く実施され、これらは、いずれも 70%前後、CQI に活用されていた。なお、「教員の他者評価」は、CQI 推進者の方が、責任者よりも有意に実施しているととらえていた。

CQI の取り組み状況について尋ねたところ、「全教員が取り組んでいる」が 17.8%、「ほとんどの教員が取り組んでいる」が 46.5%で、60%を超える大学でほとんどの教員が取り組んでいることがわかったが、35.7%は、一部の教員のみ取り組んでいるという回答であった。

また、全教員、あるいは、ほとんどの教員が取り組んでいるとした回答者に、その取り組みを促

進している要因を尋ねたところ、「全教員参加の定例会議がある」、「必要時招集される会議や意見交換の場がある」などの項目が多く、教員が CQI について話し合う場があることが取り組みを促進していることがわかった。

自大学の CQI 促進要因について、＜組織的取り組み＞、＜CQI を促進する教員の存在＞、＜大学関係者からの働きかけ＞＜CQI に関連する情報＞の 4 カテゴリ 248 要因について、あてはまるかどうかを尋ねた。＜組織的取り組み＞要因では、「自己点検・自己評価があること」、「委員会による組織的取り組みがあること」が 62.2%と多く、このうち、「自己点検・自己評価があること」は、責任者（78.4%）の方が、CQI 推進者（58.1%）より、有意に CQI 促進要因としていた。＜CQI を促進する教員の存在＞要因では、「看護学教育に関する関心の高い特定の教員の存在」75.6%、「他大学経験を有する教員がいること」60%が多かった。＜大学関係者からの働きかけ＞要因では、「臨地実習施設からの要望」が 66.5%と最も多かった。＜CQI に関連する情報＞要因では、「日本看護系大学協議会からの情報」83.2%、「文部科学省からの提言があること」76.2%が多く、このほかの CQI 促進要因と比較しても、この 2 つが最も多かった。

自大学の CQI にリーダーシップを発揮している教員について、最も該当するものを一つ選んでもらったところ、「学部長・学科長などの看護学教育責任者」、「教務委員会、FD 委員会等の責任者」が多く選ばれていた。

以上の結果から、回収率は低かったものの、全国の看護系大学では、看護学の教育責任者のリーダーシップにより、看護系大学協議会や文部科学省や看護学教育に関心の高い教員からの情報を促進要因として、委員会組織を通じた伝達と共有で教員の取り組みを促し、FD 研修、授業評価、自己点検・自己評価、カリキュラム編成・科目設計の見直しなどを CQI に活かしているといえると考えられた。そして、これらから、トップダウン的な CQI 活動は、CQI に機能しており、ルーティンで行っている評価活動を CQI に活かすことができるといえる。しかし、大学の質保証に関する議論では、評価のための評価になっているという指摘もあるため、多様な評価活動を CQI に活かす具体的な戦略を知り、共有する必要があるといえる。

一方、本調査では、敢て、実施されている CQI 活動と CQI の促進要因に焦点をあてて調査したが、取り組みが困難な状況や、そのような状況でも、CQI を促進する要因は何か、契機となるものは何かなども見いだす必要があると考えた。特に、本調査の自由記載には、教員一人ひとりから始めるボトムアップ的な CQI 活動が多様に記載されていたため、今後は、これらも分析し、さまざまな CQI 戦略を見いだす必要があると考えた。詳細は、「大学における看護学教育の継続的質改善（CQI）活動と背景要因に関する研究報告書」を参照されたい。

## （2）個別 CQI 支援

本プロジェクトでは、CQI の観点から FD マザーマップ®の活用促進と短期的効果検証を課題の一つとしており（【FD マザーマップ®活用型 CQI 支援】）、さらに、各大学のニーズに応じた CQI 支援の在り方（【各大学要請型 CQI 支援】）を検討している。平成 29 年度は、表 3 に示したように、7 大学および 1 名の教員の個別 CQI 支援を行った。

表3 平成29年度 個別CQI支援対応事例

・平成28年度実績AからF大学の継続記号で記載

・FDDBとは、FDマザーマップ®支援データベース <http://fd.np-portal.com/>

大学	主な依頼事項	主な対応
C大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成28年度研修時に当センター紹介のFDマザーマップ®対応型FDコンテンツ「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考えるー学生への対応に困った10事例を通してー」を用いたFD研修を予定。企画・運営の助言がほしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修企画の相談：FDコンテンツの10事例の事例選定や、グループ編成、ファシリテーションの検討のメール往還相談</li> <li>教育プログラムとしての看護学教育の理解、プログラム評価のロジカルモデルの知見紹介。</li> <li>当日参加とアンケート評価の共有</li> </ul>
G大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護学部実習委員会主催の実習説明会・研修会の講師を依頼したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>定例化している研修の意義および今回研修の目的・計画の確認</li> <li>講演「看護学実習の場で臨床の知を教えるとは？」</li> <li>全日程参加およびアンケート評価の共有</li> <li>FDマザーマップ®支援データベース登録案内</li> </ul>
H大学 (公立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>各委員会主催の多数のFD研修をFDマザーマップ®で整理して検討したいので、まずは、FDマザーマップ®の活用について講師を依頼したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>FD研修の企画意図の明確化とニーズに応じた講演内容の相談</li> <li>FDマザーマップ®活用に関する講演</li> <li>FDDBの登録案内と活用方法の紹介</li> </ul>
I大学 (国立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数大学の地域看護・公衆衛生看護実習を受け入れている県が主催する保健師の実習指導者研修に、利害関係のない立場で、看護学教育における臨地実習の基礎知識の講師を依頼したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>I大学側と主催者である県側のニーズの明確化。県側担当者の研修企画構想の相談</li> <li>大学へのFDDBの登録案内</li> <li>「臨地実習の意義と実習指導の基本の理解」講演</li> <li>全日程参加およびアンケート評価によるFD研修の企画や運営の評価の把握</li> </ul>
J大学 (私立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>新設大学であり、FD研修を計画的に実施していくために、FDマザーマップ®を活用していきたい</li> <li>FDマザーマップ®の活用の講師依頼</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研修企画の相談：登録済みのFDDB&amp;登録大学用FDコンテンツ“FDマザーマップ®check sheet”のガイダンス等。</li> <li>FDマザーマップ®活用に関する講演</li> <li>全日程参加とアンケート評価の共有</li> </ul>
K大学 (国立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムワーキンググループを中心に、看護学科のみのFD企画を構想中。伝統的に実施している「実習運営協議会」の企画・講演などを見直したい</li> <li>次年度の研修講師紹介も依頼したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>訪問コンサルテーション：FD企画検討のためのグループの会議に参加。医学科を含めたK大学のカリキュラム、特徴、「実習運営協議会」の機能、今回の取り組みの根底にあるカリキュラム見直しを含めた教育の質改善への課題認識の共有</li> <li>FDDBの紹介</li> <li>コンサルテーション内容のフィードバック</li> </ul>
L大学 (国立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>各委員会等が主催の多数のFD研修をFDマザーマップ®で整理して検討したいので、FDDB利用をサポートしてほしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護学科FD企画の集約を担当する委員会のミーティング参加</li> <li>FDDBのFD実績表の活用方法のガイダンス、サポート</li> </ul>
L大学のM教員 (国立)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自大学のDPを達成するには、担当科目で分野越境の授業を実施することが必要だが、連携・調整のサポートがほしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別相談と打ち合わせ会議の参加とフィードバック：一教員としての課題認識や分野越境授業の構想の意義や方法の明確化。</li> <li>科目の全授業参加・コメントシート、複数担当教員のヒヤリング等によるフィードバック</li> </ul>

まず、【FD マザーマップ®活用型 CQI 支援】について、実際の支援からわかったことを述べる。C 大学は、平成 28 年度の継続支援で、FD マザーマップ®対応型 FD コンテンツを用いた FD 研修支援、H 大学、J 大学、L 大学は、FD マザーマップ®及び FD マザーマップ®支援データベース（以下、FD 支援データベース）のガイダンスと活用支援であった。平成 28 年度と合わせてこの 2 年間で、【FD マザーマップ®活用型 CQI 支援】は、計 8 大学であった。

これら 8 大学への支援実績と、さらに、FD マザーマップ®および FD 支援データベースへの問い合わせ実績を総合すると、表 4 のような CQI 支援の要点が整理できた。そして、少なくとも、CQI 支援として、FD 支援データベースを使いやすく改築し、かつ、FD マザーマップ®活用をわかりやすく解説する情報発信が不可欠であるとわかり、FD 支援データベースの改築に着手し、FD マザーマップ®活用ガイド ver.3 を発刊することとした。

ただし、自大学の FD ニーズ分析については、端に FD マザーマップ®や FD 支援データベースの活用に関する概説だけでは不十分であり、データ収集・分析をサポートするとともに、相談者である各大学のヒヤリングなどと総合して、結果の解釈を支援することが必要であると考えられた。

表 4 【FD マザーマップ®活用型個別 CQI 支援】から見出された FD マザーマップ®活用ニーズと CQI 支援の要点と課題

FD マザーマップ®の活用ニーズ	CQI 支援の要点
FD マザーマップ®を知ることによって自大学での活用を考えたい	FD マザーマップ®のガイダンスを行う支援を行うとともに、各大学の特徴に合わせた活用やカスタマイズの相談を行う
自大学の FD ニーズの分析に FD マザーマップ®を活用したい	組織としての FD ニーズ分析のためのデータ収集・分析・結果の解釈に関する支援を行う
FD 企画を検討するための情報として FD マザーマップ®および FD 支援データベースを活用したい	FD 支援データベースにある FD 実績表の特徴と活用についてのガイダンスを行うとともに、多様な FD 企画を参照しあい看護系大学間で情報共有しやすいデータベースシステムに改築し、普及する
自大学の FD 実績を整理して俯瞰するために、FD マザーマップ®および FD 支援データベースを活用したい	FD 支援データベースの FD 実績表の特徴と活用のためのガイダンスとともに、FD 実績表入力結果を FD マザーマップ®に反映できるように FD 支援データベースシステムを改築する
教員一人ひとりの FD 課題を見出すために、FD マザーマップ®を活用したい	大学教職員としての能力査定とは異なる FD 課題を見出すための自己評価・他者評価のための活用のガイダンスを行う

次に、【各大学要請対応型 CQI 支援】について述べる。

表 3 の G 大学と I 大学への支援は、病院等実習関連施設の看護師あるいは県の保健師である実習指導者を対象とした研修の支援であった。平成 28 年度と合わせて、実習指導者研修企画相談は、計 4 大学であった。4 大学ともに、実習指導者への自大学のカリキュラム理解を促し、実習フィールドでの学生の経験の教材化について具体的に実施できるように支援する研修企画であった。

K 大学への支援は、看護学科独自 FD の企画構想時のコンサルテーションであった。【各大学要請型 CQI 支援】としては、初の訪問コンサルテーション事例となった。K 大学は、カリキュラムワーキンググループを中心に、看護学科のみの FD 企画を構想するようになり、伝統的に実施している「実習運営協議会」の企画・講演などを見直したいと考え、個別 CQI 支援を依頼した。この事例では、FD 企画検討のためのグループの会議に参加という形で訪問した。訪問コンサルテーションでは、医学科を含めた K 大学のカリキュラムの特徴、「実習運営協議会」の機能、今回の取り組みの根底にあるカリキュラム見直しを含めた教育の質改善への課題の認識の共有がされた。この事例から、そのほかの個別 CQI 支援

でも、FD 研修前後の企画者とのミーティングの場が、訪問コンサルテーションの機能と類似していたことに気づかされ、今後の CQI 支援の一形態として、訪問コンサルテーションが必要と考えられた。

さらに、L 大学の M 教員への CQI 支援は、平成 29 年度に 1 事例だけ得られた教員個人からボトムアップ的に着手する CQI 活動であり、この 2 年間で 1 事例のみ得られた事例である。M 教員の支援ニーズは、自大学の DP を達成するには、担当科目で分野越境の授業を実施することが必要だが、連携・調整のサポートがほしいというものであった。この事例での CQI 支援は、個別相談と打ち合わせ会議の参加とフィードバックであり、その都度一教員としての M 教員の課題認識等を明確化する対話を行った。また、科目の全授業に参加し、学生のコメントシートの記載内容や事前事後課題の実施状況や内容を共有し、科目を担当する複数の教員のヒアリング等を行いながら、授業と授業の関連や分野越境型授業の位置づけなどについて繰り返し意見交換を行い、フィードバックした。なお、この事例は、生涯学修支援につながる授業の工夫に関するものであり、高等教育方法の一般論ではなく、専門職教育である看護職養成教育の特徴を踏まえていた。そして、一人ひとりの教員の日常の授業改善の取り組みに焦点を当てているものの、分野や領域を超えた教員間の話し合いの契機を必要としていた。

以上から、【各大学要請型 CQI 支援】のニーズと支援の要点や課題を見出すには、事例が十分とはいえないが、暫定的に、支援ニーズと CQI 支援の要点・課題を表 5 に示す。

表 5 【各大学要請型個別 CQI 支援】から見出されつつある支援ニーズと CQI 支援の要点と課題

各大学要請型 CQI 支援ニーズ	CQI 支援の要点
<p>[実習指導改善 FD 研修]            直接の利害関係のない外部講師の講演とフィードバックにより、自大学の臨地実習指導者へのカリキュラム理解と教材化を促進する FD 企画を実現するための外部支援がほしい</p>	<p>各大学のカリキュラムの特徴、実習フィールドの特徴、大学と実習フィールド関係者の互恵的關係などに着眼しつつ、具体的な事例を用いた講演を聴くことで、相互交流・意見交換の機会を持ち、大学教員と実習指導者の教育実践の場での協働の契機とする</p>
<p>[看護学科独自 FD 企画コンサルテーション]            定例化している看護学の全領域で実施している実習運営に関する情報交換と意見交換の場を再検討し、看護学科の特徴を踏まえた独自の FD 企画に取り組みたいので、外部支援がほしい</p>	<p>課題認識を有する教員が再検討したいとする定例化した自大学の教育関係者が集合する場についての認識や自大学の特徴及び展望について話し合う契機となる訪問コンサルテーションを行う</p>
<p>[授業改善 CQI]            高等教育方法の一般論ではなく、専門職教育である看護職養成教育の特徴を踏まえて、生涯学修支援となる授業の工夫に取り組むための契機をつくりたい (授業改善 CQI 支援)</p>	<p>アクティブ・ラーニングなどの高等教育全般に対する全学 FD とは異なるものとして、看護学教育の授業を改善するための工夫を見出すために、分野を超えて取り組むような FD 企画や分野を超えた教員間の話し合いの契機をつくる</p>

また、【FD マザーマップ@活用型 CQI 支援】でも、【各大学要請型 CQI 支援】でも、FD 研修の開催を前提とした個別 FD コンサルテーションとしては、FD 研修企画の立案と運営のサポートとして、自大学の組織としての現状分析のサポート、FD 研修の目的の明確化、FD 研修方法の検討、グループ編成のアイデア提供、グループ討議のファシリテーション、講義とグループ討議の構成と関連づけ、FD 研修の評価方法のアイデア提供と評価の共有などが必要であった。これらを、すでに開発済みの FD 支援データベースにある FD 実績表の入力項目と対照する (表 6) と、教育プログラムとしての FD 研修の実績には表れにくい、FD 企画の背景にある各大学の現状分析や課題認識の明確化に関する支援が、重要であるといえるのではないだろうか。これは、本報告書では別途記載される看護系大学 FD 企画者研修でも共通した発見でもあった。

表6 個別 FD コンサルテーションに共通する FD 研修サポートと FD 実績表入力項目の対照

個別 FD コンサルテーションに共通していた FD 研修企画の立案と運営のサポート	FD マザーマップ®支援データベースにある FD 実績表入力項目
<p>自大学の組織としての現状分析のサポート</p> <p>FD 研修の目的の明確化</p> <p>FD 研修方法の検討</p> <p>グループ編成のアイデア提供</p> <p>グループ討議のファシリテーション</p> <p>講義とグループ討議の構成と関連づけ</p> <p>FD 研修の評価方法のアイデア提供と評価の共有</p>	<p>プログラム名</p> <p>プログラムは単独企画か・シリーズ企画か</p> <p>プログラム目的 (講義・演習・実習遂行能力、研究能力、社会貢献能力、組織運営能力の向上、他)</p> <p>プログラム実施方法 (講義、演習、グループワーク、学外研修、その他)</p> <p>プログラム内容</p> <p>実施主体</p> <p>対象者</p> <p>参加人数</p> <p>プログラム実施時間</p> <p>使用した教材・資料</p> <p>使用した機器・備品</p> <p>プログラムの計画書・立案書の有無</p> <p>費用</p> <p>評価方法 (参加人数、参加者の評価、FD 委員会での総括、同僚の評価、上司の評価、他)</p> <p>次回に向けての改善点</p> <p>FD マザーマップ®の該当項目</p>

### 3. センターホームページリニューアル

本プロジェクトでは、看護学教育研究共同利用拠点としての情報発信と大学間のネットワーク形成を重視している。そこで、当センターのホームページの現状を分析したところ、当センターの特徴や事業内容の説明を中心としたものであったため、看護系大学教員が、当センター発信の情報を閲覧しやすくし、当センターの研修事業等の申し込みなどを円滑にするための改築を行った。

主なポイントは、下記である。

- センターの理念や概要をわかりやすくする
- FD マザーマップ®支援データベースおよび組織変革型看護職育成支援データベースに遷移しやすくする
- 現在までのプロジェクトと成果の紹介をわかりやすくする
- 各種研修事業の web 申し込みを可能にし、研修内容、研修成果を分かりやすくする
- 「活用可能な情報・資料一覧」というページを作成し、「調査研究・事業報告」、「FD・教育活動改善のヒント」、「看護実践改善のヒント」「教育と実践をつなぐヒント」「高等教育に関する情報」の5カテゴリを設定し、各種情報にアクセスしやすくする



#### 4. FD マザーマップ®支援データベース改築・FD マザーマップ®活用ガイド ver. 3 の発刊

先述した個別 CQI 支援を通して、【FD マザーマップ®活用型 CQI 支援】として、「看護学教育における FD マザーマップ®の開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」で開発済みの Web ページ「FD マザーマップ®支援データベース」および、パンフレット「FD マザーマップ®活用ガイド ver.2」の情報提供の不足を改善する必要があるとわかり、「FD マザーマップ®支援データベース」を改築し、「FD マザーマップ®活用ガイド ver.3」を発刊した。

Web ページの「FD マザーマップ®支援データベース」の改築では、登録大学への登録内容確認と改築意見のメール調査を行い、以下の点を改善した。

- ① レイアウトの改善・活用方法の説明の追加・修正
- ② 登録大学用ページの「FD 実績表」エントリーで「自大学のみ公開」と「一般公開」の択一に改善
- ③ 同「FD 実績表」エントリーで、FD マザーマップ®対応項目のレベル I、II、III の複数選択を可能に改善
- ④ 同「FD 実績表」を各大学で随時再編集できる機能を実装

パンフレット「FD マザーマップ®活用ガイド ver.3」における主な改訂は、FD マザーマップ®および FD 支援データベースの運用を CQI プロジェクトの一貫と位置づけ、【FD マザーマップ®活用型個別 CQI 支援】等での実績から、わかりにくい表現箇所を加除修正し、上述の FD 支援データベースについての紹介ページを充実させ、「個別 FD コンサルテーション」について、個別 CQI 支援で実施している内容を反映させたことである。

これらにより、Web ページやパンフレットから、FD マザーマップ®をヒントにした各大学の CQI が行われることも考えられ、今後の評価が重要である。

#### 5. CQI モデル試案の方向性

以上のような取り組みと、本報告書で別途記載する平成 29 年度看護学教育ワークショップ、看護系大学 FD 企画者研修、文部科学省受託研究の成果を総合し、平成 29 年度末に、当センター教員の看護学教育 CQI モデル開発委員会では、CQI モデル試案の作成に向けて、次の点を確認した。

まず、看護学校教育の CQI とは何かについて、全国調査時は、看護学教育 CQI 活動とは、看護系大学の教員が実施している自大学の看護学基礎教育課程における教育の質改善活動のうち、組織的に行っており、回答者が、継続的な質改善につながると判断しているものとした。しかし、その後の文献検討や個別 CQI 支援実績から、平成 29 年度看護学教育ワークショップ時は、“看護学教育の継続的質改善(CQI)とは、教員の課題認識から自律的に実施されている看護学教育の質改善を、組織的に継続して推進する活動である”とした。現在、大学の質保証のための大学管理者の教学マネジメントの強化・推進が謳われているが、看護学教育の CQI とは、大学のトップリーダーが大学管理のために行うものとは視座が異なる。無論、大学のトップリーダーも教員の一人という意味では含まれるが、看護学教育の CQI という場合、むしろ、教員一人ひとりが、実際の教育実践において、学生との協働関係の中で見出していく教育の課題認識を重視し、日常的に看護学教育の質改善に取り組んでいることを確認し、可視化し、共有し、組織的に継続して取り組むことができるようにすることであるだろう。しかしながら、実際には、看護学教育の CQI という概念はわかりにくく共通言語とはなっていない。今後、本プロジェクトにおける用語使用として洗練し、明確にしていく必要がある。

また、当センターの看護系大学に関する事例の蓄積は、個別 CQI 支援大学 13 大学、FD 企画者研修 5 大学、看護学教育ワークショップ全日程参加大学（平成 28 年:70 大学、平成 29 年:65 大学）と相当数にのぼる。これから CQI に取り組む特徴としていくつかのパターンを見出しつつある。現時点では、次の 4 パターンを試みに整理した。

- 新設大学で完成年度にメンバーが入れ替わる予測の大学で、次を引き受ける世代が課題認識からアクションをおこす
- 開学後 2 クール程度卒業生をだし、卒業生評価のタイミングにあり、教員の流動性のある大学で、カリキュラムの見直しや FD 研修会企画などのワーク担当者がアクションをおこす

- 安定的運営になっているため、自大学の特徴の見直し、CQI についての話し合いの契機をつくる  
ことが難しい中で、学生や地域との関係性の中からの課題認識のある教員が、ボトムアップにア  
クションをおこす
- 教学マネジメントによりトップダウン CQI が常になり、その中での教員一人ひとりの課題認識  
を共有することが少なくなっている大学の中で、ワーク担当者あるいは課題認識のある教員が、  
アクションをおこす

また、個別 CQI 支援に限らず、CQI 支援に求められていることは、現時点では、下記の 5 点と考えた。

- 自大学の特徴を俯瞰するための情報提供（高等教育全般の動向、看護系大学の動向と多様性の具  
体的情報、外部指針の理解）
- 相談者の課題認識を問題指向のみから強み発見へと拓いていく対話
- 相談者の課題認識の根拠となっているデータ、情報について確認することによる組織分析構想の  
支援
- 相談者の立ち位置、大学全体の組織運営体制、組織文化、人員構成などの理解への働きかけによ  
る、アクションプラン構想の支援
- 課題認識を有する相談者へのピアサポート

そして、看護学教育の CQI モデル開発に向けて確認できたことは、現在、看護系大学は、外部の指針  
や外部評価への対応を迫られる中で、自大学としての自律的な組織的な教育の質改善の方向性を確認し  
たり、取り組み内容を選定したり、組織再編をしていくことに混乱を生じやすい状況にあるということ  
である。大学における看護学教育に関する外部指針だけでも、看護学教育モデル・コア・カリキュラム  
（文部科学省）、日本学会議健康・生活科学委員会看護学分科会がまとめた「大学教育の分野別質保  
証のための教育課程編成上の参照基準 看護学分野」、JANPU が提示している「看護学士課程におけ  
るコアコンピテンシーと卒業時到達目標（案）」があり、そのほかにも高等教育政策で示される指針や  
保健医療福祉政策の中で示される指針が多数ある。したがって、まずは、こうした外部指針や外部評価  
に翻弄されるのではなく、誰が、どのように CQI を推進していくのかについてのいくつかのヴァリエー  
ションを見出しながら、FD と CQI の関連を整理し、CQI について話し合う場をもつ契機となるモデル  
を開発する必要があると考える。また、CQI に取り組む上で、各大学が自大学の進む方向性を中長期的  
に見出すための視座を整理するモデルも必要であろう。そして、CQI のプロセスで、自大学の CQI の  
状況を確認するときにヒントになる視点を整理するモデルも見出せるとよいと考える。さらに、CQI を  
推進するプロセスで、自大学が今どのような経過、時期、状況であるかを確認し、説明できるようなモ  
デルも開発できるとよいであろう。

現段階では、具体的な概念整理になるような模式図としてのモデルを示すことはできないが、こうし  
た議論を経て、次年度には、モデル試案を作成していきたいと考えている。

### 3. 大学における医療人養成の在り方に関する 調査研究委託事業

看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究

—学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発—

本事業の目的は、各看護系大学が、「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（以下、『到達目標 2011』）を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な、多様性を前提とした評価方法の提言をめざすことである。

本事業では、平成 27 年度から下記に示す 4 本の調査研究（研究 1、2-1、2-2、2-3）を実施し、その成果を用いた看護学教育ワークショップ（WS）の開催を行った。本事業の最終年度である今年度は、その成果を統合し、専門家会議による意見交換を行い、提言を作成した。また、事業成果の情報発信のため、パンフレットを作成した。

- ・研究 1. 全国の看護系大学における「到達目標 2011」の活用実態と背景要因の解明（全国調査）
- ・研究 2-1. 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発（後ろ向き事例研究）
- ・研究 2-2. 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発. 看護系大学における卒業時到達目標評価を含む教育の質改善への支援ニーズ（支援ニーズ WEB 調査）
- ・研究 2-3. 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発（前向き事例研究）

研究 1 は平成 28 年度に実施終了しているが、成果の統合をしているため、研究 1 も含めて報告する。

#### 1) 研究 1. 全国調査

研究目的は、看護系大学における『到達目標 2011』の活用状況およびその背景要因を明らかにし、『到達目標 2011』をより有効に活用し教育の質を保証するための課題を抽出することである。

調査は、平成 27 年 4 月 1 日現在で文部科学省が発表している 248 大学の①看護系の学部長・学科長・専攻長等の管理責任者 1 名、②1～4 名の科目責任者を対象に個別投函郵送調査で行った。調査票は、平成 27 年度に実施した 7 大学のインタビュー調査とその後の専門家会議を経て作成し、Ⅰ. 回答者や大学の基本属性に関する質問、Ⅱ. 「到達目標 2011」の活用実態、Ⅲ. 貴大学における卒業時到達目標の評価方法と課題に関する質問で構成されている。データ収集期間は、平成 28 年 7 月 10 日～8 月 10 日である。

この調査によって、『到達目標 2011』は、各大学において、カリキュラムの検討や教育内容の網羅性の確認など、看護系大学にとっての「外部指針」として機能していることが明らかになった。

#### 2) 研究 2-1. 後ろ向き事例研究

研究 1 における調査票作成のために行ったインタビューでは、先駆的に『到達目標 2011』を活用している大学を含み、設置主体、地域、開学年数などの特徴の異なる大学を対象としていた。そこで、データの二次利用の同意を得て、『到達目標 2011』の活用を含む教育の質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）への取り組みの実態および特徴と背景要因について、分析対象大学ごとに記述し、事例を比較分析することで、看護学教育の質改善に関わる背景要因を見出すこととした。

本看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け（承認番号 28-91）、7 大学から研究協力への承諾を得て、実施した。

7 大学の結果を表 7 に示す。大学の状況によっては、必ずしも、外部指針を活用した教育の質改善の

必要性は認識されず、積極的な活用にはいたっていなかった。外部指針を活用して教育の質改善を実施するパターンの大学においても、教員間の合意形成のための意図的に活用したり、自大学の特徴をふまえて柔軟に解釈して役立てるなど、活用状況は多様であった。

表7 7大学の『到達目標2011』の活用を含む教育の質改善への取り組みと背景要因の関連

パターン	教育の質改善への取り組みの特徴と背景要因との関連	大学
外部からの指針を積極的に活用して教育の質改善を実施するパターン	人口流出等の地域の課題解決への期待を背負っているという教員の自覚が動機づけとなり、「到達目標2011」等を積極的に活用し、教育改善を持続的に実施している	A
	人口減少や高齢化等の地域の課題解決への期待を背負っているという教員の自覚が動機づけとなり、「到達目標2011」等を積極的に活用し、教育改善を持続的に実施している	C
	地域のニーズ把握から必要性を明確にして開設された大学であり、それが大学の理念や教育方針にゆるぎないものとして明示されているため、外部指針を解釈する教員の視点が定まっており、「到達目標2011」等を柔軟に解釈して、教育改善に役立っている	D
	地域のニーズを第一に考える看護専門職を育成する、という大学の使命が明確であり、それを浸透させ、実現するための手段として、「到達目標2011」等を積極的に活用し、教育改善に役立っている	E
	新設大学のため教育目標に関する教員間の合意形成が不十分であるとの自覚が動機となり、「到達目標2011」等を積極的に活用し、教育改善を持続している	G
外部からの指針を活用した教育の質改善を実施していないパターン	世界的な成果を生み出す研究大学としての自負があり、「到達目標2011」等を活用した組織的な教育の質改善は行われていない	B
	地域の課題解決に向けた教育は積極的に実施しているが、それを「到達目標2011」等の全国的な指針と関連づけてはいない	F

### 3) 研究2-2. 支援ニーズ WEB 調査

WEB 調査は、平成 28 年度の WS 後のフォローアップとして、支援ニーズを把握することを目的として実施し、さらに WEB 調査回答の二次使用の許諾を得たデータから、「到達目標 2011」の活用を含む WS 後の教育の質改善に向けた取り組み状況を調査した。平成 28 年度の WS では「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか」をテーマに情報・意見交換を行い、自大学のアクションプランの作成と実施へのヒントを得ることを目的とした。WEB 調査の項目は、WS の内容や経験に関する自大学での共有、WS 時に立案したアクションプランの実施状況、アクションプランを含む自大学で、現在、取り組んでいることに WS の内容や経験がどのように役立ったかなどである。本看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け実施した（承認番号 28-124）。

WS 全日程参加者 70 名のうち、28 名が WEB システムに入力し、そのうち 26 名がフォローアップデータの二次使用を承諾した。WS 後の『到達目標 2011』の活用状況、活用で気づいた内容、活用への意向については、下記 A、B、C に示す。WS であらためて『到達目標 2011』を参照し、活用を知ることによって、WS 参加大学では、他の教員に伝えることや、自大学のディプロマポリシー等を点検したり、自大学の卒業時到達目標で重視していることに気づくなど、質改善に向けた変化の様相があった。

#### A. WS 後の『到達目標 2011』の活用状況

- 28 名入力、うち二次使用承諾者 26 名
- 「到達目標 2011」を参加前から活用していた 14 名
  - 内容をよく確認した 10 名
  - 自大学のカリキュラムと照合 11 名
  - 自分の担当領域と照合 11 名
  - 自大学の卒業時到達目標と照合 7 名
  - 他の教員と「到達目標 2011」について話した 7 名
  - 学生と「到達目標 2011」について話した 1 名
  - 保健医療福祉機関の関係者と「到達目標 2011」について話した 1 名
- 「到達目標 2011」を参加前は活用していなかった 12 名
  - 内容をよく確認した 5 名
  - 自大学のカリキュラムと照合 7 名
  - 自分の担当領域と照合 6 名
  - 自大学の卒業時到達目標と照合 6 名
  - 他の教員と「到達目標 2011」について話した 9 名

#### B. WS 参加後の「到達目標 2011」活用で気づいた内容

<自由記載の一部>

- (参加前活用なし) 次年度からの DP や CP の改定中に何度となく話題に上がり、到達目標 2011 を意識したものとなっていったと思った。以前はそこまで気にしていなかった。
- (参加前活用なし) 自学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーには、一部、反映されているが不足している内容もあった。
- (参加前活用あり) 自大学の卒業時到達目標で大事にしていることが明確になった
- (参加前活用あり) 自大学の教育目標と到達目標 2011 を照らし合わせて齟齬はないものの、その教育活動や評価活動が、システムティックに行われていないことに気が付いた。
- (参加前活用あり) 学部内で卒業時到達目標について自由に話し合う機会をもつことの必要性を感じた。
- (参加前活用あり) 専門用語の概念、言葉の定義などを明確にしておかないと検討しづらい。

#### C. WS 参加後の「到達目標 2011」活用に関する意向

<自由記載の一部>

- システムティックにかつ効果的に(教育を)行うためには、到達目標 2011 を十分に理解したうえで、4 年間のどの時期にどのような内容を教授し、かつ積み重ねていくか、それらをシステムティックに評価する仕組み(教育評価マップ作り)に取り組んでいきたい。
- 現在、卒業時到達目標の達成状況はコアの部分のみ、自己評価してもらっているため、もっと詳細な評価と、カリキュラム、科目の内容にも反映したい。
- 大学独自の「卒業時までには到達すべき看護技術」のツールがあるが効果的に運用できていない。既存のツールの効果的な活用法の検討に取り掛かると共に、再度「到達目標 2011」の各能力と本学が提示する技術項目について再吟味して項目の整理をする必要がある。さらに、教員はもとより(特に若い教員は理解が不十分のように感じる。)学生とも「到達目標 2011」について話し、DP にもつなげるべく理解を深める機会が必要であると強く感じている。

### 4) 研究 2-3. 前向き事例研究

平成 28 年度の WS の参加者のうち、自大学での教育の質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)の取り組みに、当センターの支援を希望していた参加者に打診し、前向き事例研究に取り組んだ。研究目的は、卒業時到達目標の活用を含む教育の質改善の様相、要因、要件などを含む事例提示である。5 大学の参加を得て、質改善に向けた事前インタビューおよび、必要時の相談、半年～1 年後のインタビューを実施した。本看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け実施した(承認番号 28-92)。

5 事例大学の概要を表 8 に示す。5 事例大学ともインタビューが自大学の理念や 3P、特徴、強み、現実的な状況を語る場となり、CQI の取り組みの方向性を検討する核となっていた。また、外部指針を十分に理解し、それを自大学でどのように活用するかを検討する際、自ずと自大学の自律性が自覚され、質改善に向かうことが示唆された。また今回のインタビューは、インタビュー自体が結果的に他大学教員からのピアサポートとなり、CQI の推進に影響していた。その際「到達目標 2011」のような外部指針はピアサポートの媒介物となっていた。

表8 卒業時到達目標を含む教育の質改善の事例研究：5 事例大学の概要

大学名	H	I	J	K	L
設置主体	私立	公立	私立	私立	私立
インタビュー (その他相談回数)	2回	2回 (メール2回)	2回 (電話2回)	2回	2回
被インタビュー 者の立場	教授1名 准教授1名 教育委員	着任して数年の 准教授	准教授(1回目) ↓ 教務委員、コアカ リ検討委員会委 員長、教授	教務委員長 教授	学内カリキュラム ワーキングメンバ ー、コアカリワー キング責任者 教授
CQIのテーマ	学士課程の看護学 教育として十分な内 容を保証し、また自 大学の特徴となる先 駆的取組となるよう に臨地実習指導體 制の見直し、そのた めの「看護基礎教 育」への理解を深め るFDを企画する	自大学の「到達目標 2011」の活用とDPと の関連に疑問をもち 行動をはじめが、 全体の動きがまだ十 分に把握できず、自 分の立ち位置から他 の教員や学生の状 況を把握し始める	ワークショップで獲得 した「到達目標 2011」の活用を智恵 に、モデルコアカリの 外部指針や、他学科 との合同活動など資 源を認識し、自大学 の教育の評価をどの ようにすすめるか検 討する	ワークショップで自大 学のDPを見直す必 要性に気づき、「到 達目標 2011」も参考 にしながらDPを再構 築する。同時に新カ リ編成やそれに伴う 教育の検討を、自大 学の創設時からの伝 統と特徴を価値づけ ながらすすめる	地域貢献を使命とし て、事務方、行政、 住民、学生の参加を 得て、領域の壁を越 えた教員の合意形 成を図りながら、自 大学の強みを活かした 様々なユニークな 教育の実現をすす めている

### 5) 平成29年度看護学教育ワークショップの実施

研究2を通して、各大学の自律的な教育の質改善の取り組みにおいては、異なる大学間での情報交換や、具体的な戦略を練る機会が必要であることがわかった。そこで、平成29年10月26日(木)～27日(金)の2日間、『看護学教育の自律的・継続的質改善(CQI)の戦略を練る』というテーマで、WSを開催し、65大学67名の全日程参加者を得た。このWSでは、看護学教育モデル・コア・カリキュラム、日本看護系大学協議会が検討中のコアコンピテンシー、日本学術会議が検討中の看護学分野の教育課程の参照基準など、複数の外部指針が提示される見通しが立つ状況下で、こうした外部指針の特徴を理解し、活用していくための情報提供のニーズがあることがわかった。

### 6) 事業成果の統合・専門家会議を経た提言・パンフレットの完成

上記の4つの研究および2回のWSの情報を統合し、提言案を作成した。平成28、29年度のWSのファシリテーターや助言者であった先生方をメンバーとして依頼し、平成29年12月20日に開催された専門家会議で、提言を検討した。研究成果の統合からは、図(看護系大学における「到達目標2011」活用の実態)の関係性が見いだせた。

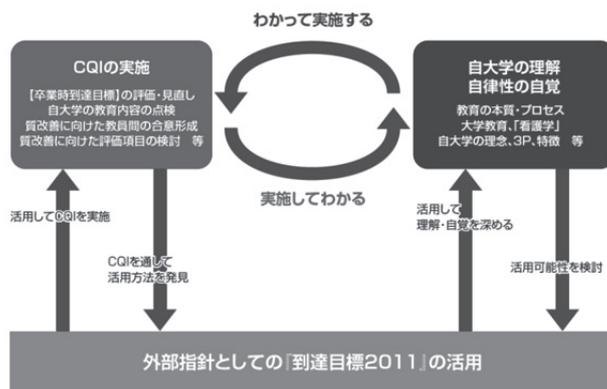


図 看護系大学における「到達目標2011」の活用の実態

以上の研究の統合を基盤に、当センターから、『到達目標 2011』を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な、多様性を前提とした評価方法への提言を以下にまとめた。

### 【提言】

「自大学の卒業時到達目標」の達成度を評価するとは、自大学に適した評価方法を決め、実施するプロセスである。『到達目標 2011』を活用しながら着実に教育の質改善を継続するために有効な多様性を前提とした評価方法は、画一的で汎用性のある方法ではなく、各大学の自律的な教育の質改善（CQI: Continuous Quality Improvement）の実施の一部である。

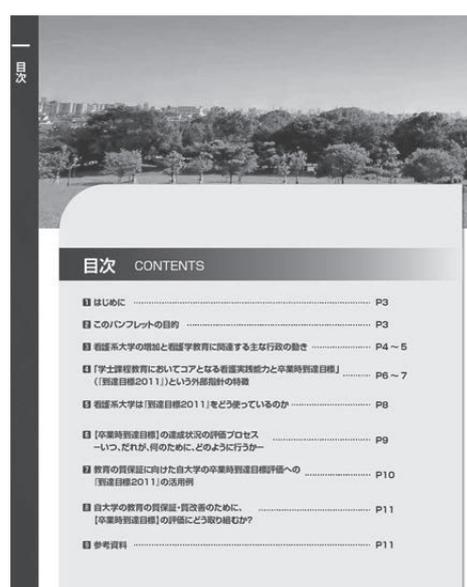
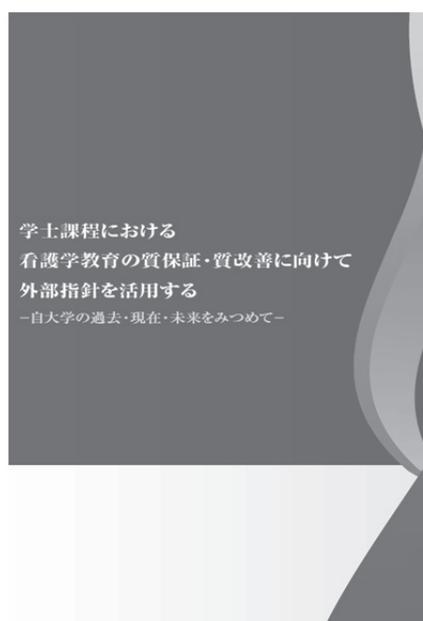
そのCQIのプロセスで重要なのは、自大学のありようを、過去、現在、将来にわたり理解し、大学教育や「看護学」の理解に基づき、自大学の自律性の自覚をもつことである。

『到達目標 2011』は外部指針であり、外部指針は、その特徴を理解し、「自大学の卒業時到達目標」の達成度の評価を含むCQIのプロセスにおいて、随時、有効に活用していくことが重要である。

そのためには、まず外部指針である『到達目標 2011』の特徴を知り、参照することを通してCQIに向かう刺激を受けてみることをすすめたい。また自大学の現状分析から、『到達目標 2011』の活用可能性を考えてもよい。本事業の成果は、CQIのプロセスにおける多様な活用方法を提示しており、参考にできる。

そして、外部指針を随時、有効に活用し、その活用について大学間で情報交換したり、ピアサポートを相互に実施することで看護系大学のCQIが推進され、質確保に貢献できることを期待する。

さらに、事業成果を効果的に活用してもらうためのパンフレットを作成した。提言にもとづき、パンフレット原案を作成した後、平成 28、29 年度の WS の参加者の先生方に依頼し、平成 30 年 2 月 21 日に専門家会議で意見交換を行った。その結果を反映し、パンフレットは、「学士課程における看護学教育の質保証・質改善に向けて外部指針を活用する－自大学の過去・現在・未来をみつめて－」と題し、全国の看護系大学の教員が、学生、保護者、実習施設や大学等の関係者、卒業生、地域・市民等とともに自大学の教育の質評価・質改善への取り組みをする際に活用することを目的としたものとして完成した。



## 4. 共同研究

### ■共同研究 1

#### 「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える

#### 看護学教員向けFDコンテンツの開発と評価」

##### 1. 研究組織

山本 真実	(岐阜県立看護大学・講師)
高島 尚美	(関東学院大学看護学部・教授)
和住 淑子	(看護実践研究指導センター・教授)
黒田 久美子	(看護実践研究指導センター・准教授)

##### 2. 研究概要および研究経過

###### 1) 「看護学教育におけるFDマザーマップ®」とは

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成23～27年度にかけて、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトに取り組み、「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を完成させた。

「看護学教育におけるFDマザーマップ®」は、看護学教育の特質を踏まえた看護系大学教員に求められる能力が、〔基盤マップ〕〔教育マップ〕〔研究マップ〕〔社会貢献マップ〕〔運営マップ〕の5つのマップに体系的に配置され、教員の能力レベルは、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」という3段階に区分されている。(http://fd.np-portal.com/)

###### 2) FDコンテンツの開発

「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を実際に活用した大学からは「必要とされる能力が体系的にまとまっていてよい」「自大学のFDを見直す良い機会になる」等の評価を得た一方で、「実際にFDマザーマップ®をどのように活用すればよいのか」「具体的にはどのようなFD企画を立案すればよいのか」といった戸惑いの声も聞かれた。FDマザーマップ®の開発と同時に作成した「看護学教育におけるFDマザーマップ®活用ガイド」ではFDマザーマップ®の活用例を紹介してきたが、看護学教育の現場では、より具体的、実践的なFDツールが求められており、FDコンテンツ開発の必要があることがわかった。

###### 3) 開発したFDコンテンツ

本プロジェクトでは、看護系大学教員として、日々の学生との関わりの中で、どのように対応したらよいか、困る場面に着目して開発した。一般に、このような状況に直面した場合、その対応は、教員個人に任されているが、教員間で対応が食い違ったり、後から組織的な問題に発展したりすることもある。つまり、対応に困る状況に対する個々の教員の

反応は、その教員個人のもつ教育観の現われであり、また、それだけではなく、組織のあり方にも影響を受けているといえる。

そこで、本FDコンテンツは、日々の学生との関わりの中で、教員が対応に困る典型的な場面を10事例とりあげ、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えることを目的に開発した。この成果は、平成28年度に報告書としてまとめ、全国の看護系大学及び関係機関に配布した。

〔報告書〕看護学教育研究共同利用拠点、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向けFDコンテンツ開発と評価」プロジェクト研究共同研究員、和住淑子、黒田久美子、高島直美、飯岡由紀子、山本真実：「看護学教育におけるFDマザーマップ®」対応型FDコンテンツ開発報告書、教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考えるー学生への対応に困った10事例を通してー、1～48、2017年3月

#### 4) 開発したFDコンテンツの評価

看護系大学教員として日々直面する現状の問題から必要なFDコンテンツを開発する過程で、あらためて看護系大学教員として備えるべき能力を明らかにすることができ、FDマザーマップ®を活用することで、それらの能力を体系的に整理することができた。これは、「教員としての日々の活動とその活動の中から生まれる問題意識を大切にする」、「FDマザーマップ®を活用して問題を整理する」、「問題解決に資するFDコンテンツを開発する」のいずれから着手しても、看護系大学のFD活動を推進できる可能性がある、ということを示唆している。

これらを踏まえ、平成29年度は、実際に本FDコンテンツを使用してFDを実施した大学や、本FDコンテンツを使用してFDを計画している看護系大学を対象とした、本FDコンテンツの評価研究を計画した。次年度は、実際の評価研究および新たなFDコンテンツの開発に取り組む計画である。

## ■共同研究 2

### 「看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究」

#### 1. 研究組織

- 大友 英子 (東京大学病院・看護師長)  
西山 正恵 (千葉県立保健医療大学・講師)  
池袋 昌子 (茨城キリスト教大学・准教授)  
坂元 眞奈美 (鹿児島大学病院・副看護部長)  
相原 綾子 (獨協医科大学看護学部・助教)  
望月 由紀 (千葉大学大学院看護学研究科・特任准教授)  
炭谷 大輔 (千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)  
近藤 麻理 (東邦大学看護学部・教授)  
小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・国際保健学領域・准教授)  
溝部 昌子 (国際医療福祉大学福岡看護学部・准教授)  
浜崎 美子 (康生会武田病院・看護部長)  
町田 今日子 (日本ビューレット・パッカート社・プロジェクトアドミニストレータ)  
大島 紀子 (千葉大学大学院看護学研究科・研究生)  
野地 有子 (千葉大学大学院看護学研究科・教授)

#### 2. 研究の概要

本プロジェクト研究は、平成 25 年度より開始された継続プロジェクトである。国際医療展開が国レベルで加速されているが、その内容は 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、医療通訳等の配置、保険商品の検討（訪日外国人旅行者の約 30%が保険未加入で医療費の未払いの問題につながっている）などが主であり、外国人患者の対応で困っている看護師の課題に直接結びつくものはまだ少ない。よい看護を提供しても誤解が生じ医療事故も危惧され、病院における看護職の文化的能力の教育と環境整備が急務である。そこで、本研究プロジェクトでは、現状を把握し、看護職の文化的能力の評価を踏まえ、能力開発・臨床応用を中心にすすめる。

#### 3. 本年度の成果

##### 1) 看護職調査による量的質的アプローチによる検討結果

先行調査として実施した看護職のカルチュラル・コンピテンスに関する調査結果から、質的量的アプローチによる検討を行った。調査票は、Caffrey Cultural Competence Health in Healthcare Scale 28 項目の日本語版 (J-CCCHS) を用い、9,140 名に配布し、7,494 名 (91.3%女性、平均年齢 32.6 歳) の有効回答を得た。統計的に信頼性と妥当性が検証された J-CCCHS は 5 段階のリッカートスケールであり、加算により得点が高い方が、カルチュ

ラル・コンピテンスが高いとアセスメントされる。本研究参加者の 28 項目の平均は、1.85 (SD0.52) であり、米国の先行研究と比較して低いことが示された。本年度は、潜在特性分析 (LPA: Latent Profile Analysis) を行い、対象集団の潜在的なサブタイプを明らかにした。その結果、3つのサブタイプが示された。クラスアサイメントは、タイプ 1 は 39.9%、タイプ 2 は 47.95%、タイプ 3 は 12.1%であった。各タイプの CCCHS の平均値は、タイプ 1 は 1.11-1.73、タイプ 2 は 1.40-2.79、タイプ 3 は 2.42-3.12 であった。タイプ 1 は、海外渡航経験が全く無いか少なく、国際関係論等の受講者が少なく、異文化の人々との出会いの機会が少ない者が多くみられた。タイプ 3 は、外国人患者を受け持った経験があり、外国人ナースなどとの協働の経験者が多くみられた。わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンスのサブタイプが明らかとなり、教育プログラムの開発と評価にいかすことができる。

質問紙調査への回答には、自由記載を含み、外国人患者への看護ケア提供における困難を記載したのは 4,738 名 (51.8%) であった。記載者数の多い順による上位 50 の困難内容は、1 位「コミュニケーション」(該当記載者 2,736 人, 36.5%) の他、「違い」、「説明」、「理解」、「文化」、「緊張」、「不正確」等であった。有効回答者一人あたりの、これら上位 50 の困難に該当する記載数は、0 (未記載者含む) ~14 であり、0 (37.9%) を除くと最頻値は 2 (18.9%) であった。属性との関連では、記載困難数の中央値が女性 2.00 にて男性より高く ( $p=.000$ )、管理職が他職位より低い 2.00 ( $p=.000$ )、人生の大半を海外にて過ごした者は最高値の 6.00 であった ( $p=.000$ )。有効回答者数 7,494 人のうち、30%以上がコミュニケーションを外国人患者への看護ケア提供における困難として記載しており、このコミュニケーションにおける困難が「説明」「不正確」等とつながり、看護ケアに影響を及ぼしている。看護師あたりの困難数については、その属性や海外渡航経験と関連があることが明らかとなった。医療安全の観点からも、また患者がその出身国にかかわらず十分な受療となるため、言語的かつ文化的媒介となる資源が必要であるとともに、看護師の属性や海外滞在経験等に鑑みた文化的能力向上方策が必要であることが示唆された。

## 2) 研究成果活用のためのアプリ開発

看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究を進めるためのアプリの開発を継続した。これまで検討してきた、全体構造、外国人患者に対する看護ケアに関する事例集、測定スケールを活用した教育プログラムの臨床応用に資するアプリの開発を進めている。アプリへの活用を念頭に、イラストの制作に着手した。社会実装に向けた研究を継続し、わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンスが病院などの組織の核となることを目指す基盤となる成果を得た。

## 4. 次年度の計画

臨床および教育における、能力開発・臨床応用の実際と評価をすすめる予定である。

## ■共同研究3

### 「公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発」

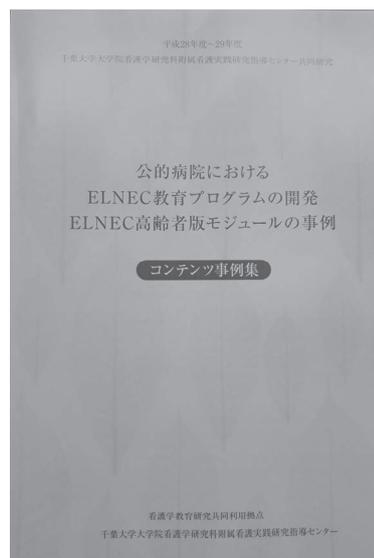
(ELNEC: End of Life Nursing Education Consortium)

#### 1. 研究組織

- Roger Strong (サンディエゴ大学・特任教授  
サンディエゴ退役軍人病院・看護管理者)
- 近藤 麻理 (東邦大学看護学部・教授)
- 相原 綾子 (獨協医科大学看護学部・助教)
- 小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
- 野地 有子 (千葉大学大学院看護学研究科・教授)

#### 2. 研究の概要

本プロジェクトは、エンド・オブ・ライフ看護学への関心の高まりを背景に、センターの大学病院看護管理者への研修プログラムの特徴を活かして、公的病院における本テーマに関する教育プログラムの検討を行うために開始したプロジェクトであり、継続的に取り組んでいる。米国の ELNEC 開発のメンバーである、Dr. Roger Strong を共同研究員に迎え、米国本部より ELNEC 指導者の認定を受けた共同研究員からなるプロジェクト構成である。本年度は、事例検討を行い、米国の ELNEC 本部の許可を得て翻訳事例集の編纂をおこなった。



コンテンツ事例集

#### 3. 本年度の成果

- 1) ELNEC 高齢者版モジュールの事例の翻訳
- 2) 事例の教育における活用
- 3) コンテンツ事例集の編集発行

本プロジェクトの共同研究員である Strong 博士は、30年にわたる緩和ケアでの臨床実践と研究および ELNEC を通して米国内はじめ国際的にエンド・オブ・ライフケアの教育に尽力されている。豊富な経験と知見を踏まえ、本プロジェクトに ELNEC の教材の最新版の提供ならびに、助言がなされた。教材の使用許可は得ている。

公的病院でエンド・オブ・ライフケアを提供するために、本年度は ELNEC の高齢者版の 9 つのモジュールに含まれるケーススタディを翻訳し、大学教育において活用のうえ、コンテンツ事例集の編纂を行った。

モジュール毎の事例数は、表 1 に示す通りである。

表 1. モジュール別事例数

モジュールの課題	事例数
モジュール 1 : エンド・オブ・ライフケアの原則	2 事例
モジュール 2 : 痛みのアセスメントとマネジメント	4 事例
モジュール 3 : エンド・オブ・ライフケアにおける 痛みを伴わない症状	7 事例
モジュール 4 : エンド・オブ・ライフケアにおける ケアの目標と倫理的課題	4 事例
モジュール 5 : エンド・オブ・ライフケアにおける 文化的・スピリチュアルな配慮	8 事例
モジュール 6 : コミュニケーション	2 事例
モジュール 7 : 喪失、悲嘆、死別	3 事例
モジュール 8 : エンド・オブ・ライフケアの質の保証	5 事例
モジュール 9 : 臨死期の準備とケア	2 事例
合計	37 事例

#### 4. 次年度の計画

地域包括ケアの推進とも連動して、公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発について、公的病院版モジュールの事例検討を進める予定である。

## ■共同研究4

### 「FDコンテンツ開発（国際）」

#### －10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進－

#### 1. 研究組織

- 近藤 麻理 （東邦大学看護学部・教授）  
小寺 さやか （神戸大学大学院保健学研究科・准教授）  
溝部 昌子 （国際医療福祉大学福岡看護学部・准教授）  
相原 綾子 （獨協医科大学看護学部・助教）  
炭谷 大輔 （千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員）  
野地 有子 （千葉大学大学院看護学研究科・教授）

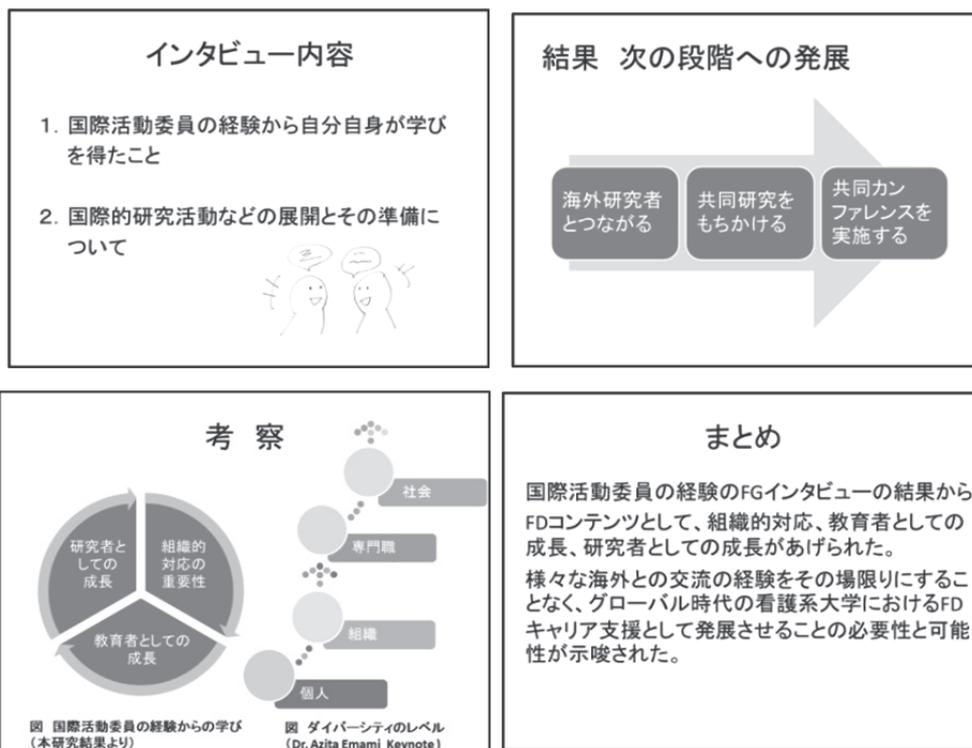
#### 2. 研究の概要

本センターで開発した、看護学教育のためのFDマザーマップ®の活用推進のためのコンテンツ開発を目的とした。本プロジェクトチームは、国際交流推進のためのコンテンツに取り組んだ。FDマザーマップ®の位置づけは、教育マップ2-6「学生支援」の中の「国際交流の推進」を中核とした。研究成果を報告書Vol.2として発行した\*。

#### 3. 本年度の目的と成果：グローバル時代の看護系大学におけるFDとキャリア支援

高等教育分野において国際化が急速に進められる中、昨年度の本共同研究の調査参加校の看護系大学の95%に国際活動（交流）委員会が設置されていた。しかし、担当教員の負担感は大きく、FD（Faculty Development）のニーズは高い。本研究の目的は、教員の国際活動委員の経験が、自己の成長やキャリア発展にどのように影響しているのかを質的に記述し、国際活動推進のためのFDコンテンツの開発について、キャリア支援の視点を踏まえて検討することである。本研究の中間報告として、これまでのまとめを述べる（スライドは、第37回日本看護科学学会（仙台）における口演発表「グローバル時代の看護系大学におけるFDとキャリア支援—国際活動委員会の教員の経験の展開から—」の抜粋である）。

目的	方法
<ol style="list-style-type: none"><li>1. 教員の国際活動委員としての経験が、自己の成長やキャリア発展にどのように影響しているか質的に記述し</li><li>2. 国際活動推進のためのFDコンテンツの開発について、キャリア支援の視点を踏まえて検討すること</li></ol> 	<ul style="list-style-type: none"><li>• 対象 国際活動委員を1年以上経験した看護系大学の教員9名（機縁法）</li><li>• 方法 フォーカスグループインタビュー（FGI） 3か所、1回およそ90分</li><li>• 倫理的配慮 千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会承認（28-110）</li></ul>  <p>図4 FGI開催地</p>



本研究より、グローバル時代の看護系大学におけるFDでは、学生や教員の国際活動（受入れや派遣）を通じた多様な経験が、教員のFDにつながっていることが示唆された。グローバル時代の看護系大学における教員の能力開発（FD）において、国際活動委員の経験は多様性（ダイバーシティ）を広げる具体的な機会になると考える。

今後、組織的な環境整備やキャリア支援などの課題に取り組む必要性が改めて示された。調査にご協力いただきました大学の皆様に深謝いたします。

参考文献：野地有子、近藤麻理、小寺さやか、飯岡由紀子、溝部昌子、炭谷大輔（2016）：

「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」コンテンツ報告書，19-38.

<http://fd.np-portal.com/content/detail/31/?page=1>

#### 4. 次年度の計画

FD マザーマップを活用した「国際交流に関するFD ニーズ」の高いことから、看護系教員のニーズに基づいた、教員のポジティブな経験に着目したFDコンテンツの開発を継続して進める予定である。また、国際交流活動・海外研修における危機管理について、さらにコンテンツの充実をすすめる。ご協力ご参加いただきました皆様に御礼申し上げます。

※本年度報告書：「10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進」コンテンツ報告書 Vol. 2, 1-29, 2018.

## ■共同研究5

### 「合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発」

#### 1. 研究組織

飯岡 由紀子（埼玉県立大学大学院研究科・教授）  
遠藤 和子（山形県立保健医療大学保健医療学部・教授）  
小川 純子（淑徳大学看護栄養学部・准教授）  
松岡 千代（佛教大学保健医療技術学部・教授），  
吉本 照子（看護実践研究指導センター・教授）

#### 2. 共同研究の背景

2016年4月、障害者差別解消法及び改正障害者雇用促進法の施行により、障がいをもつ学生各々の状況に応じた「教育上の合理的配慮（合理的配慮）」のもとに学生の学修機会を保障することがもたらされている。看護学教育における臨地実習では、実習施設の患者・家族、実践者および学生全員の安全・安心を確保し、実習施設の看護の質、および他の学生の教育の質保証等も考慮して合理的配慮を行う必要がある。こうした多様な要因を学生の個別性に即して調整し、学生全員の実践力の到達目標を達成するには、教員および実践者の教育能力の開発(FD)、新たな教育方法の開発や専門的な支援体制の構築が必要であるが、臨地実習における合理的配慮の考え方あるいは教育方法に関する報告はまだ少ない。

そこで、看護系大学に共通する課題として、平成27年度から4大学の教員とセンター教員が協力し、FD マザーマップ®対応型のFDプログラム開発に取り組むこととした。

#### 3. 研究状況

平成28年度に続いて、FD マザーマップ®に対応したレベルⅠ「合理的配慮を必要とする学生および支援方法に関する理解」、レベルⅡ「個別事例への教育実践力強化」の試案を各実施機関（A 県看護教育連絡協議会、B看護系大学、C看護専門学校）からの要請に応じて実施し、評価結果をもとに精練した。

また、多様な障がいをもつ学生への合理的配慮あるいは教育上の調整を要する事例に関し、共同研究者らの教育実践をもとに、対応の考え方と方法を商業誌に連載して<sup>1) -8)</sup>、FDプログラム試案の試行において活用するとともに、対応の留意点として、医療の場の学習環境における学生と教員の状況、教員の困難感の要因および対応の基本的な考え方の意識化、学生への先入観や障害の決めつけの予防、学生の困難感の解決をもとに指導者と連携して学生の特徴を活かすこと等<sup>9)</sup>を述べた。

本研究成果の活用に向けて、第37回日本看護科学会学術集会にて交流集会<sup>10)</sup>を企画し、先行のFDプログラム<sup>11)</sup>を参考に、開発者の許諾を得て、体験型演習を考案して実施し、試案の紹介および意見交換を行った（参加者126名、うち体験型演習参加者67名）。体験型演習により、聴覚障害者の状況を共有することができた。研究組織に障がいをもつ当事者を加える必要性、また障害をもつ学生の立場から、教員とともに教育調整に参画している状況について意見交換した。

FD マザーマップ®レベルⅢ「自大学における合理的配慮の組織的取り組み」のコンテンツ開発に向けて、多様な看護学教育分野の臨地実習における合理的配慮の事象の構造について、教員の困難感と対処、およびその関連要因に関する質的因子探索型調査・分析を行っている。

なお本研究は、JSPS 科研費 JP16K15888（研究代表者：飯岡由紀子）の助成、および本センター予

算にて実施した。

## 文献

- 1) 小川 純子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第4回) こだわりが強く,臨機応変な対応やスケジュール管理が苦手な学生への対応.看護教育,5(4),322-327,2017.
- 2) 遠藤 和子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第5回) 遅刻,忘れ物・紛失物が多く,どこことなく落ち着かない学生への対応.看護教育,58(5),400-405,2017.
- 3) 松岡 千代:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第6回) 感情起伏が激しく,敵味方の区別が著しい特徴をもつ学生への対応.看護教育,58(6),484-488,2017.
- 4) 飯岡 由紀子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第7回) 気分の落ち込みと学習意欲の低下が強く,気分の変動により学習に支障を来している学生への対応.看護教育,58(7),576-581,2017.
- 5) 松岡 千代:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第8回) 極端に食事量が少なかったり,過食と嘔吐を繰り返す学生への対応.看護教育,58(8),698-703,2017.
- 6) 飯岡 由紀子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第9回) 学習意欲や集中力の低下や思考の混乱がある学生への対応.看護教育,58(9),786-791,2017.
- 7) 飯岡 由紀子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第10回) 軽度の聴覚障害のある学生への対応.看護教育,58(10),872-878,2017.
- 8) 飯岡 由紀子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第11回) 痛みや行動制限がある学生への対応.看護教育,58(11),965-971,2017.
- 9) 吉本 照子:「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える(第12回)【最終回】 学生の学びを促す対応に向けたFDの考え方と試み.看護教育,58(12),1050-1057,2017.
- 10) 小川純子, 飯岡由紀子, 松岡千代, 吉本 照子, 遠藤和子:臨地実習において配慮が必要な学生に対する教育上の調整に関するFDプログラムの開発, 第37回日本看護科学会学術集会交流集会,2017年12月17日,仙台.
- 11) 平成29年度第1回アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成公開講座「学生の抱える困難の理解と支援」教育関係共同利用拠点(教育・学修支援専門職を養成する実践的SDプログラムの開発・運営拠点)千葉大学アカデミック・リンク・センター  
[https://alc.chiba-u.jp/ALPS/sd/files/openlecture\\_H29-1.pdf](https://alc.chiba-u.jp/ALPS/sd/files/openlecture_H29-1.pdf) (2018年4月8日)

## 5. 研修事業

### 1) 国公立大学病院副看護部長研修

国公立大学病院副看護部長研修は、平成 18 (2006) 年度から現在に至るまで、当センターの独自事業として実施している。研修開催に至った経緯は、国立大学病院看護部長会議からの要請として、大学病院の看護部長をサポートする副看護部長に対し、上級看護管理者としてマネジメント能力向上を図るための研修の必要性が求められたことに端を発する。「国公立大学病院副看護部長の看護管理研修に関わる実践的教育プログラム開発」に関する調査研究の成果を踏まえ、具体的な大学病院の副看護部長研修の実践的教育プログラムが開発され、毎年継続して開講されている。

#### 1. 研修目的および目標

研修の目的は、わが国の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者として必要な実践能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることである。

研修の目標は、次の 10 項目である。

- (1) 日本の医療を取り巻く現状を理解する。
- (2) 大学病院における組織のあり方を理解する。
- (3) 人間および人間関係を構造的に把握するための知識を得る。
- (4) 自施設の組織変革に向けた課題を構造的に把握するための方法を知る。
- (5) 自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にする。
- (6) 効果的な企画立案技術を身につける。
- (7) 効果的なプレゼンテーション技術を身につける。
- (8) 自施設の組織変革に向けた課題を抽出し、関連情報の分析を通して実践計画を立案できる。
- (9) 他の医療施設における組織運営の実際を知り、自施設の組織変革に役立てることができる。
- (10) 関連部門の理解と協力を得ながら立案した実践計画を展開し、その成果について事実に基づき評価することができる。

#### 2. 研修の形態および内容

研修の対象者は、国公立大学病院副看護部長とし、副看護部長に就任後経験 2 年以降の者とした。定員は 20 名である。

研修の特徴は、実践力を高めるために、研修期間を以下の 3 期に分けた分散研修方式をとったことにある。集合研修は下記の日程で実施され、10 ヶ月間にわたる。個別プロジェクトのコンサルテーションを含み、受講料は 9 万円である。

研修 1 : 平成 29 年 6 月 21 日 (火) ~ 6 月 24 日 (金) 4 日間

研修 2 : 平成 29 年 9 月 27 日 (火) ~ 9 月 30 日 (金) 4 日間

研修 3 : 平成 30 年 3 月 1 日 (木) ~ 3 月 2 日 (金) 2 日間

各研修の間の期間には、自施設においてより具体的な計画の立案や、その実施および評価を行い、その間にも、センター教員から継続した指導を得ながら、また他の研修生の大学病院を相互に訪問する他施設訪問により、比較検討しながら、実践力を高められるようシステム化されている。

研修の内容は、研修 1 では、医療政策、医療情報学、組織論・組織分析、教授システム学、医療倫理、

病院経営、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅰ）などから構成され、講師は各分野の第一人者および本研究科の教員が担当した。

研修 2 では、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅱ）、課題抽出・分析演習、企画立案演習、コミュニケーション・人間関係論演習、プレゼンテーション演習等、個人ワークおよびグループワークを組み合わせ、外部研修講師およびセンター教員の指導のもと各自が実践計画の立案を行った。

研修 3 では、実践報告会を行なった。2 日間にわたり、全員が自施設で実施した実践計画に基づく実施結果および評価について学会形式で発表を行い、研修生、教員等との質疑応答により内容を深めた。この発表会での質疑応答を踏まえて、報告書を作成し提出となる。報告書は、研修生の同意を得て「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援データベース」へ登録される。

(<http://www.np-portal.com/report/years/>)

## 研修 1



開講式



講義：組織論・組織分析  
花田光世先生



講義：成人教育と教授システム  
青木太郎先生

## 研修 2



演習：課題抽出・分析演習



演習：課題抽出・分析演習



授業の様子

## 研修 3



成果発表の様子



修了式：中村伸枝研究科長より修了証授与



修了式 宇野光子専門官

### 3. 研修の評価

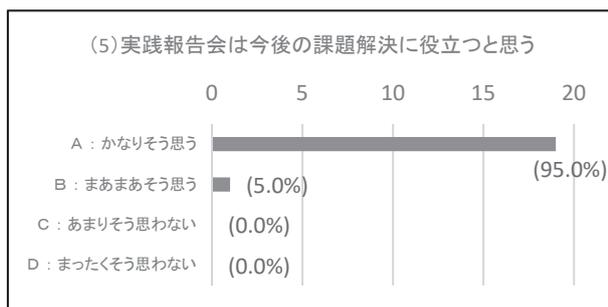
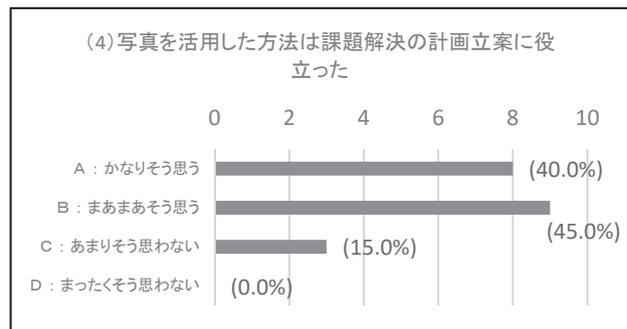
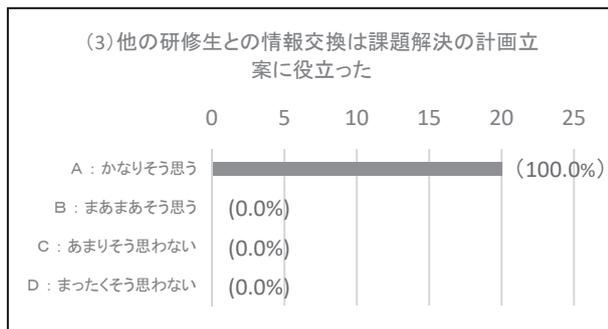
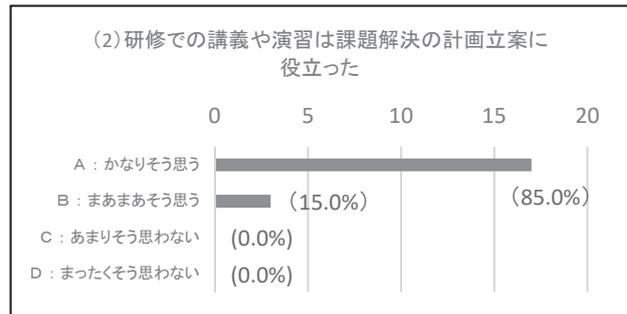
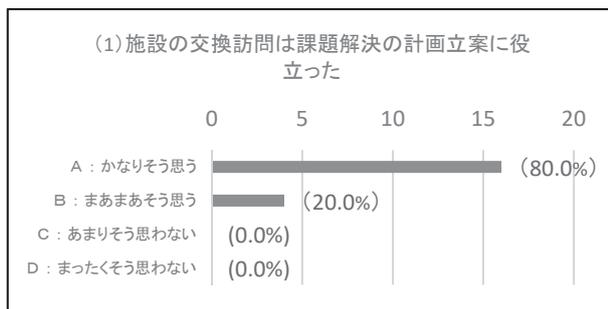
研修の全体評価を、研修3の終了後にアンケートにて実施した。アンケートは、倫理的配慮のうえ、無記名とし回答は自由意思によるものとした。

#### 1) 参加者の背景

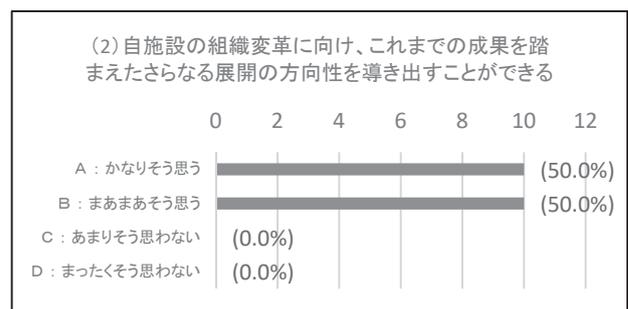
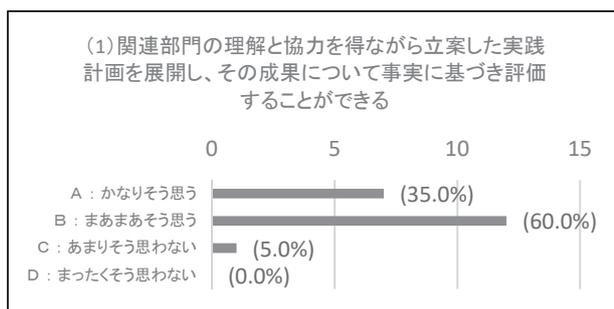
研修受講者は20名のうち、回答のあった受講者は20名であった。所属施設の設置主体は、国立9名、公立4名、私立7名であった。副看護部長経験年数は、平均3年3ヶ月であった。年齢は、40歳代1名、50歳代19名であった。受講動機は、自ら希望が10名、上司にすすめられてが9名、無回答1名であった。

#### 2) 研修内容について

研修内容について5項目で「かなりそう思う」～「全くそう思わない」の4段階により自己評価を行った。



#### 3) 研修目標の達成について



研修内容の評価では、役に立った項目は、「情報交換」「実践報告会」「他施設訪問」「講義演習」等であった。目標達成状況は、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせると、9割以上を示していた。全国から集まった研修生との情報交換や他施設訪問、および実践報告会の内容については高い評価が示された。

#### 4. 自由回答欄から

##### 1. 計画の立案や実施で受けた支援では、

- 担当者の先生とグループメンバーで話し合う機会があり、いろいろな視点から考えることができた。
- 自由に発想させてくれたこと。そしてタイムリーな関わりをしてもらったこと。自分の考える方向にすすめてくれたことが大きかったと思います。
- 研修生との情報交換が有意義でした。
- いつでも担当教官にご相談できる体制があったにもかかわらず、その体制を活用できなかった事は反省点です。
- 実践計画は具体的に計画立案ができないと半年後に成果を報告することが難しいということがわかりました。計画立案の具体性についてのアドバイスや方向性についてご指導いただけるとよいと思いました。計画立案時には適切にご指導いただいたので、途中12月又は1月頃指導の機会をいただけるとよいと思いました。
- 自分の選択したテーマの問題点が自分だけでは抽象的だった事をより具体的になるようなサジェスションをいただきました。
- 最後に頂いた先生の言葉に救われました。ありがとうございました。
- 自分の頭にあることでそれをつい省略して表現していることに第三者として理解できるかどうかのフィードバックや方法論として適切かのフィードバックや承認がいただけると前に進みやすいと思いました。
- 自分の考えや課題を他者に理論的に説明していくことの難しさを痛感しての研修であった。グループのメンバーや担当教員に支援していただき、課題が明確になった。
- 課題を明確にするために思考を導いていただきました。(そこに一番の苦労がありました)研修Ⅱで実施したグループに分かれての演習での教員の先生方からのサジェスションや助言、メンバーからの意見・コメントは、思考を深めていく上で大変有意義でした。もう少し時間をいただけると有難いです。

自施設内では可能な範囲での協力は得られましたが、かかえている仕事と予期せぬ施設の事情や出来事があり、予定通りにすすめられないことがあります。

##### 2. 研修2～研修3を通して学んだことでは、

- 研修を通して根本となる考え方や取り組みについて学ぶことができた。取り組みはこれからであるが自分の中で取り組む中で「ぶれない」ものができたように思う。
- 研修に参加した副部長の横のつながりを感じた時期でした。他施設訪問では、たくさんの援助を頂きました。
- 自分の所属する組織を客観的に見ることの難しさを感じました。固定観念を取り除いてゼロベース思考で考える難しさを感じました。自己の発するメッセージを相手に届けることの難しさを実感しました。「無理だ、できない」と決めつけずに発想の転換が重要だと感じました。
- 自分もってきた課題について研修2のグループワークで学んだことをもとに何とか解決策を考え

実施できた。

- 現状分析の上で課題を明確にしたあと、実践計画を考えていく段階で講義からの学びが大変助けになったと思います。  
「新しい事」を漠然としないといけないように考えていましたが、そうではなく今ある状況からどう進めていくか、何をどう使い資源としていくかをかなり考える時間となりました。
- 実践計画を実行するためには、組織全体に（看護部全体）その目的を伝える事は重要である。また継続的に取り組むためには実践した事をしっかり評価して次につなげる事が大事だと感じた。
- 副部長としての活動は師長の時とどう違い、どうあるべきなのか改めて考える時間となりました。研修生の発表を聞き OJT を受けているような学びができました。
- この研修会に参加したことが、自施設の問題解決の促進につながったことは間違いないと思います。講義、演習で学んだことはもちろんですが同じ立場のみなさんとの語りは自身の実践管理において、時には焦り、内省することも多くあり、自施設では体験できないことが多くありました。是非語る機会、指摘し合える機会が多くあるとよいと思いました。
- 研修 2～3 までの間に様々な課題があり、あっという間に過ぎてしまいました。課題への取りくみに力をそそげなかったことが反省です。研修 2 と研修 3 の間にもう一度研修があると相談や進捗管理できてよかった。
- 日常の業務の中で計画実践を行うため他施設見学や実践の状況が「これでよいのか」「他の人たちはどんな様子か」と考えながらとりくみを継続しました。他施設見学は、これまでなかなか目的を持って見学する機会がなかったのでとても勉強になりました。複数の見学ができるとさらによいと思いました。
- 研修 3 では、それぞれの病院で皆さんがどのようにプロジェクトを組んで実行したかのアプローチ方法がとても参考になりました。
- 自病院でこれから取り組まなければならない課題のヒントを沢山いただきました。
- 他施設の副部長との意見交換をくり返す中で、自分の課題が明確になっていった。組織の中での自分の役割やあるべき態度を学ぶことができた。人脈の大切さを感じた。他の皆様の発表されている以外の活動が大変興味深く参考になりました。
- 大学病院における副看護部長の立場で組織変革を実践していくことの意味、難しさ、苦勞、やりがい、考え方などあらためて考える機会となりました。研修 3 ではそれぞれがかかえていることの背景ととりくんだ課題を知り、とりくむ課程を知ることで、一緒に体験したような気持ちで学ばせていただきました。  
この研修で一緒に学んだ皆さんの実践は私にとっても‘疑似’体験のように感じ今後に向けての大きな力と宝になりました。
- 教員の先生方に温かく適切にご指導をいただき、悩んでいたときであり、本当に支援いただきました。質疑応答の際にもお話いたしました「マインド」に気づかせていただいたこと、今後役割を遂行する上で重要な機会でした。  
他の方の報告を聞き自分自身まだ評価・概念化が不足していると感じましたので、データでの整理、今の（過去も含めた）現状の整理（理論等を用いた）を行っていきたいと思います。  
皆さま方のとりくみも自施設で活用できるものばかりで、必要時コンタクトをとりながら情報収集していきたいと思いました。
- 計画から実践に移す場合の組織内の合意を得ること。業務をかかえながら行うことの大変さ等を感じ

じました。

- 自分が課題を展開しているからこそ様々なところに問題意識を持ちアンテナをはることで、得るものが大きかったと思います。情報を取得すればするほど課題の解決の必要が明確になりました。

### 3. 副看護部長研修全体については

- 横のつながりができたことが一番の財産となります。
- 実践報告会は研修生の様々な取り組みの報告を受け今後の活動の参考になります。多くのヒントをもらうことができました。
- 他大学病院のいろいろな情報や参考することを聞くことができる横のつながりができたことはとても私にとって財産となりました。
- 研修内容（講師・講義内容）はどれも自身のニーズに合ったもので大変大きな学びが得られました。演習で他大学の方々との話し合いが多く持つことができ意義深かった。
- 他大学の副部長さんたちと交流ができ楽しかったです。又、発表会で様々な報告を聞くことができとても勉強になりました。ご指導頂いた先生方のコメントがあたたかく、多少疲れた中での報告会なのでとてもうれしく思いました。
- 全国のネットワークができた事はとても良かったです。
- 1年を通して、新しい知識や実践に対するご指導、たくさんいただきましたことは大変有難いことでした。副看護部長としての責任と役割をあらためて自覚するとともに今の立場で行うことのできる、いえ、今の立場だからこそ変革できること、そしてそれがいかに組織にとって大きな力になるか気づかせていただきました。今回の歩みは止めることなく確実に進んでいけるよう今後も努力していきます。ご指導いただきありがとうございます。全国にネットワークを築かせていただいたことも大変有難く感じております。
- 大変有意義な研修のため他の副部長にも参加することをすすめました。自病院だけでなく他病院の動向や体制等参考になった。顔を合わせての研修ですので今後のネットワークづくり、そして友人への広がり、本当に感謝いたします。博士にも挑戦したいかなと思いました。
- 研修参加当初は自分の役割を遂行する上での課題が山積みで整理がつかなかったが、講義を受けて焦点をしばり優先度を決定することができた。他施設でのとりくみや現状について情報が得られ有意義であった。すべての報告が自施設の課題について参考となる報告であったので残念であった。
- 先生方のご指導、そして共に学んだ副部長様皆様に感謝します。とても楽しく仲間を得ることができました。
- 通常では知り合うことのできない研修生・他大学病院の副部長の皆さんとのネットワークがつくられたことは大きな収穫です。また、担当の先生方の幅広く先を見すえたアカデミックな視点を学ぶことができました。先生方にふれ大学がとても身近に感じられたことも収穫です。長い期間にわたり、教員の先生方をはじめ事務の方々、各所にご配慮いただき感謝申し上げます。

平成 29 年度国公立大学病院副看護部長研修

[研修 I]

	I		II	III	IV	V	
	8:50~10:20		10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40	
5月30日(火)		10:00~ ※開講式 オリエンテーション		医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 宇野光子	組織論・組織分析 慶應義塾大学名誉教授 SFCフォーラム代表理事 花田光世		懇親会
5月31日(水)	医療情報学 京都大学医学部 医学研究科 教授 中山健夫			医療安全 日本医療機能評価機構 理事 橋本廸生	看護管理論(1) 神戸大学医学部附属病院 副病院長・看護部長 松浦正子	組織変革のための 評価 (看護評価学) 藍野大学副学長 菅田勝也	
6月1日(木)	成人教育と教授システム学 日本BLS協会 代表 青木太郎			病院経営(財務管理) 兵庫県立大学大学院経営研究科 教授 小山秀夫		看護管理論(2) NTT東日本関東病院 副看護部長 木下佳子	
6月2日(金)	組織論・組織分析/ 公的病院における エド・ワブ・ライフ 千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター 教授 野地有子		情報収集・分析に関する理論 (方法論 I) 情報工房 代表 山浦晴男		医療倫理 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 手島恵	研修Ⅱに向けた オリエンテーション (~17:00予定)	

[研修 II]

	I		II	III	IV	V
	8:50~10:20		10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40
8月29日(火)		10:20集合 研修Ⅱ オリエン テーショ ン <第二講義室>	情報収集・分析に関する理論(方法論Ⅱ) 情報工房 代表 山浦晴男 <第二講義室>		課題抽出・分析演習 情報工房 代表 山浦晴男 <第二講義室>	
8月30日(水)	課題抽出・分析演習 情報工房 代表 山浦晴男 <第二講義室>					プレゼンテーション 演習 千葉大学大学院看護学研究科 教授 野地有子 <第二講義室>
8月31日(木)	プレゼンテーション 演習 千葉大学大学院看護学研究科 教授 野地有子 <第二講義室>	組織変革のための 企画立案 東京医科歯科大学 医学部附属病院 副院長・看護部長 川崎つま子 <第二講義室>	コミュニケーション・ 人間関係論演習 茨城キリスト教大学 生活科学部 心理福祉学科 講師 黒澤 奏 <第二講義室>	企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科教員 (吉本、野地、和住、黒田、銭) <セミナー室1~5>	医学部附属病院 見学研修 (希望者) <医学部附属病院>	
9月1日(金)	企画立案演習 千葉大学大学院 看護学研究科教員 (吉本、野地、和住、黒田、銭) <セミナー室1~5>				研修Ⅲに向けた オリエンテー ション (~15:00) <第二講義室>	

[研修Ⅲ] 平成 30 年 3 月 1 日(木)、2 日(金) 実践報告会

## 2) 看護管理者研修

### (1) 研修目的

近年の医療制度改革では、住み慣れた地域で生活できるための医療への転換を目指して、病床機能分化が進められている。特に、急性期病院では、限られた在院日数で効果的に医療を提供し、速やかに地域での生活に戻ることができるよう支援する役割が求められている。本研修は、看護師長等現場の看護に責任を持つ職位にある急性期病院の看護管理者が、医療提供体制の変化に対応した複雑かつ重要な課題を組織的に解決する能力を開発することを通して、看護本来の役割発揮を支援することを目的として開講している。

なお、本事業は、文部科学省委託事業、特別経費による実施を経て、平成25年度から独自事業として、①ベーシックコース、②アドバンスコースの2コース構成で実施したが、アドバンスコースは平成28年度で終了し、平成29年度はベーシックコースのみ開催した。

### (2) 研修内容

- (1) 期 間：平成29年9月25日（月）～9月27日（水） 3日間
- (2) 内 容：時間割を表1に示す。
- (3) 受講者数：96名
- (4) 受講料：30,000円（消費税を含む）

表1 平成29年度 看護管理者研修（ベーシックコース）時間割

日 時	I	II	III	IV	
	9:00～10:30	10:40～12:10	13:30～15:00	15:10～16:40	
9月25日 （月）	9:30～ 国公立大学病院 看護管理者研修 開講式 オリエンテーション	急性期病院をめぐる 医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 宇野光子	医療経営管理 奈良県立医科大学 教授 今村知明	急性期病院と 地域連携 在宅移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス 宇都宮宏子	
9月26日 （火）	看護管理実践のリフレクション （演習） 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子		看護行政の動向 厚生労働省 厚生労働省 医政局看護課 教育体制推進官 関根小乃枝	看護管理におけるデータ活用の方法 （17:30 終了） 千葉大学医学部附属病院地域医療連携部 特命病院教授 小林美亜	
9月27日 （水）	特別講義 今、日本の看護職 に求められること 東京医療保健大学 副学長 坂本すが	看護管理における 文献の活用 東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科 准教授 深堀浩樹	人材育成と キャリア開発 千葉大学大学院 看護学研究科教授 和住淑子	15:15～ 国公立大学病院 看護管理者研修 閉講式 （15:45 終了）	

### (3) 実施・評価

総勢9名の多彩な講師陣で構成された講義では、少子高齢社会における人々の健康と生活の充実のために、いかに現場の看護管理者の役割発揮が重要であるかを再認識するとともに、全国の看護管理者間の良いネットワークの形成ができた。



写真 講義の様子

看護管理実践のリフレクション演習は、2時限を使って、リフレクションシートとそれを使ったリフレクションの方法を解説した後、4人程度の受講者がグループとなり、相互に意見交換するかたちで進めている。今年度は、特に、自組織に戻ってから、看護管理者として効果的なリフレクションができるよう、ポイントを体験してもらうことに力を注いだ。



写真 演習の様子

研修終了時に実施した、受講者によるの研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・ 94名からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の年齢構成は、30代1名、40代56名、50代36名であった。
- ・ 項目別の評価結果は、表1に示した。全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、8割以上であり、特に「特別講義」の評価が高かった。
- ・ 自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。

「看護管理者として国の方向性、看護界の動きに常に目を向け、情報収集することの重要性を改めて学び感じる事ができた。自部署をどのように管理するのかとても多く

の知識を得る機会となり、今後活かしていきたいと思う。」

「医療、看護を取り巻く社会の変化を改めて見つめる機会となり、看護管理者としてマネジメントする知識を深めることができた。また、リフレクションでは組織の問題を他覚的な視野から見つめ直すことの必要性を感じ、他の病院の状況も知ることが出来、良きアドバイスまで頂けた。スタッフへフィードバックして活用したいと思う。他の先生方の講演も自分自身を振り返り、新しく知識を深める機会になった。」

「今、思い悩んでいること、どのように推し進めていくべきか悩んでいるが、方向性を見出せた気がした。スタッフの力を信じて進んでいこうと思った。」

「医療や看護を取り巻く環境が目まぐるしく変化をしているのでその変化を感じて先を見通すことの大切さを再認識した。そしてそのような中においても看護の本質は忘れないようにしたいと思う。」

「講義および他病院の人たちと話せたことで自分に足りない知識や考え方を得ることができた。特に私自身の看護実践を改めて考えることができ、つい目の前で起こった事実振り返られ、患者にとって看護であったのかなかったのかということが後回しになっていることに気づいた。」

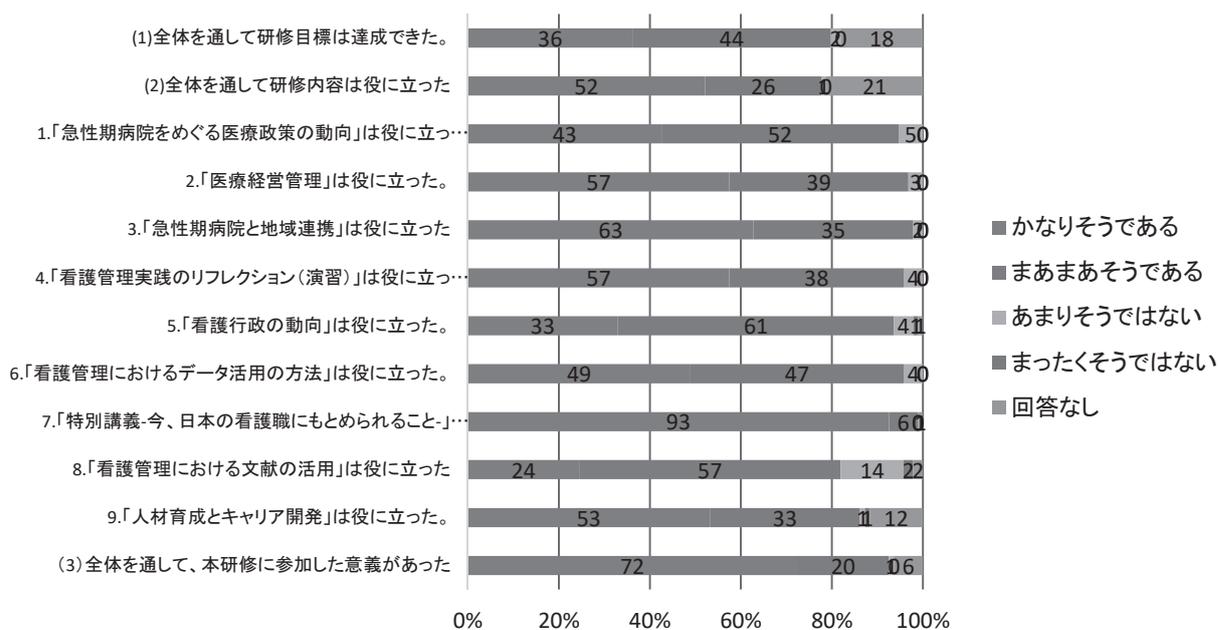


図1 終了時の研修評価アンケート結果

#### (4) 今後の課題

研修評価アンケートの本研修を今後さらに充実させていくためのアドバイスや意見の欄には「普段聴くことのできない高名な方々の講義をたくさん受講でき、ありがたかったが、内容が濃すぎて自分の中に落とし込むのが大変であった。学びを振り返れるようなGWがもう少しあると良いと感じた。」「経営なども含めて病院全体の動向などの理解は必要だと思うが、“看護管理者として今後どうしたらよいのか”という内容がもう少し多いと良いかと感じた。」といった意見があった。今後は、講義前に受講者のレディネスを高め、講義後に受講者が講義内容を自身の看護管理実践に落とし込むことができるような支援が必要であると考えられる。

### 3) 看護学教育指導者研修

#### (1) 研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が益々高まっている。本研修は、臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者である看護職が必要な能力を高め、臨地と基礎教育機関の連携・協働の充実に資することを目的として開講している。

なお、本研修は、文部科学省委託事業、特別経費による実施を経て、平成25年度から独自事業として、①ベーシックコース、②アドバンスコースの2コース構成で実施したが、アドバンスコースは、「看護系大学FD企画者研修」へと発展させて実施することとし、平成29年度はベーシックコースのみ開講した。

#### (2) 研修内容

- (1) 期 間：平成29年8月23日（水）～8月25日（金） 3日間
- (2) 内 容：時間割を表1に示す。
- (3) 受講者：39名
- (4) 受講料：30,000円（消費税を含む）

表1 平成29年度 看護教育指導者研修（ベーシックコース）時間割

日 時	I	II	III	IV	
	9:00～10:30	10:40～12:10	13:30～15:00	15:10～16:40	
8月23日 (水)	9:30～ 開講式 オリエンテーション	看護高等教育行政 の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 斉藤しのぶ	看護学教育の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 和住淑子	看護における 成人教育のあり方 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科教授 鈴木康美	
8月24日 (木)	臨地実習指導の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子	自組織の現状を踏まえた指導過程のリフレクション (17:00 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他			
8月25日 (金)	臨地実習場面の教材化 (16:45 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他				17:00～ 閉講式

### (3) 実施・評価

初日は看護高等教育行政の動向、看護学教育の基礎、看護における成人教育のあり方を学び、2日目からはグループワークを行い、上手いかなかった教育指導実践の事例をいかに教育のチャンスとして教材にしていくかをグループで検討、その検討結果を使ってロールプレイングを行いながら学びを深めた。

今年度も、昨年度に引き続き、訪問看護ステーションからの参加者があった。医療機関の看護職とは異なる視点や学生指導の経験がグループワークを活発にしていた。地域包括ケアシステムの構築に伴い、今後はさらに医療機関以外での臨地実習が増加することが予測される。多様な臨地実習施設の指導者にとっても、本プログラムでの研修が有用であることがわかった。

また、本年度から新たに開講した「看護系大学FD企画者研修」の参加者にもグループワークにしてもらい、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働の機会とした。



写真 講義の様子



写真 グループワーク・ロールプレイングの様子

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・39名全員からアンケートを回収した。
- ・受講者の職位は、スタッフ看護師19名、副師長(主任)19名、看護師長1名であった。
- ・年齢構成は、20代5名、30代16名、40代14名、50代4名であった。

- ・項目別の評価結果は、図1に示した。全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、8割以上であった。
- ・自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。
  - 「リフレクションでの振り返りで課題がより明らかになった。教材化により学生の学び、目標達成のため意見・視点・方法を学ぶことができた。」
  - 「学生指導を特別な事と思っていたが、自分自身の看護を基に指導していくことが大切と分かり気が楽になったとともに、教材化の難しさを知り、今後も自己研鑽に努めなければと気の引き締まる思いがした。」
  - 「日々、業務に追われているが、この振り返りは訓練していくことで自分のものになるのであろうと感じた。リフレクションのGWが充実していたことで今後の自分の思考の導きとなれた。とてもよい研修に参加出来たと感じています。」
  - 「自分が正しいと思って指導していた事は学生の立場から見るとどうなのかという視点で考える事ができ、指導方法の方向転換につながると思った。学習目標を明確にしておく事の必要性を感じた。」
  - 「臨地実習を受けている施設の指導者の教育の大切さを再認識した。自分達の病院でも研修を行っているが看護学科の教員と協働して行うのが効果的であると感じた。」
  - 「全国から参加している看護師と知り合い情報共有する良い機会となった。」
  - 「看護の本質はどこにいても同じ、本物の看護に学生が触れられるよう実習を提供してあげたらと思った。」

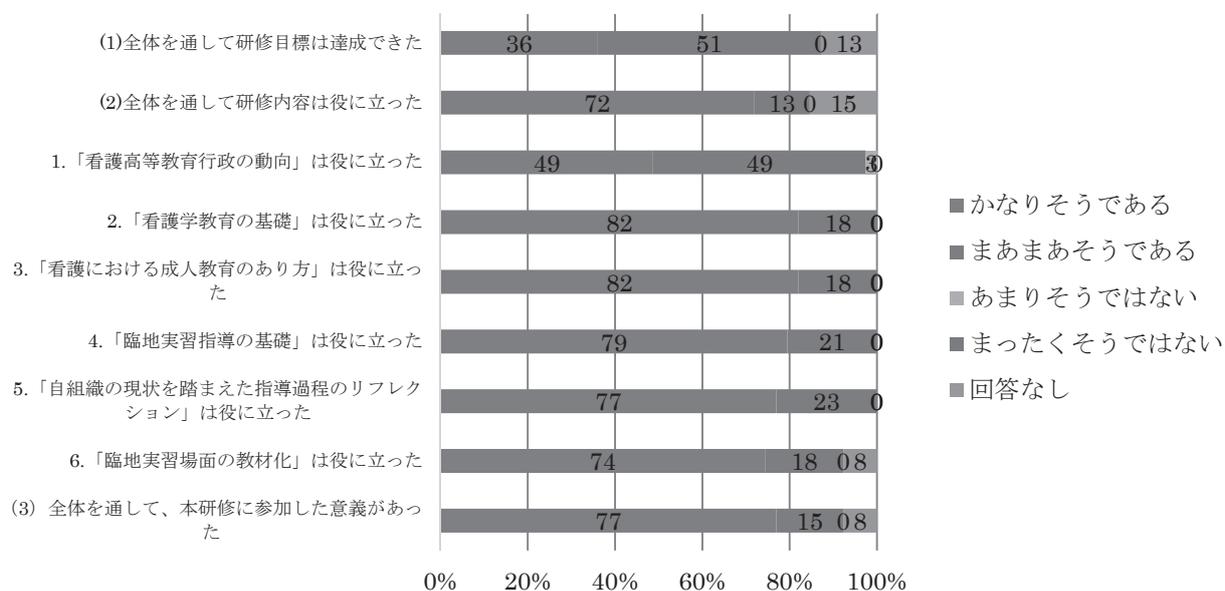


図1 終了時の研修評価アンケート結果

#### (4) 今後の課題

受講者からは「大学の先生と一緒に場面を考えられて良かった」という意見も多くあり、「看護系大学FD企画者研修」受講者のグループワークへの参加は、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働を考える上で有意義であったと考える。グループワークの前に受講者自身の経験をワークシートに書いてもらうのにやや時間がかかっていた受講者もいたため、今後は、記載例を示すなど、支援が必要であると思われる。

#### 4) 看護学教育ワークショップ

平成29年度の看護学教育ワークショップは、看護学教育研究共同利用拠点の中心的な事業として、「看護学教育の自律的・継続的質改善（CQI）の戦略を練る」テーマで開催された。なお、このワークショップでは、「看護学教育の継続的質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）」を“教員の課題認識から自律的に実施されている看護学教育の質改善を、組織的に継続して推進する活動”とした。また、「CQI戦略」とは、参加者が、自大学の看護学教育のCQIのために、組織的に取り組んでいこうと考えているアクションプランを指すこととした。

開催概要は以下の通りである。

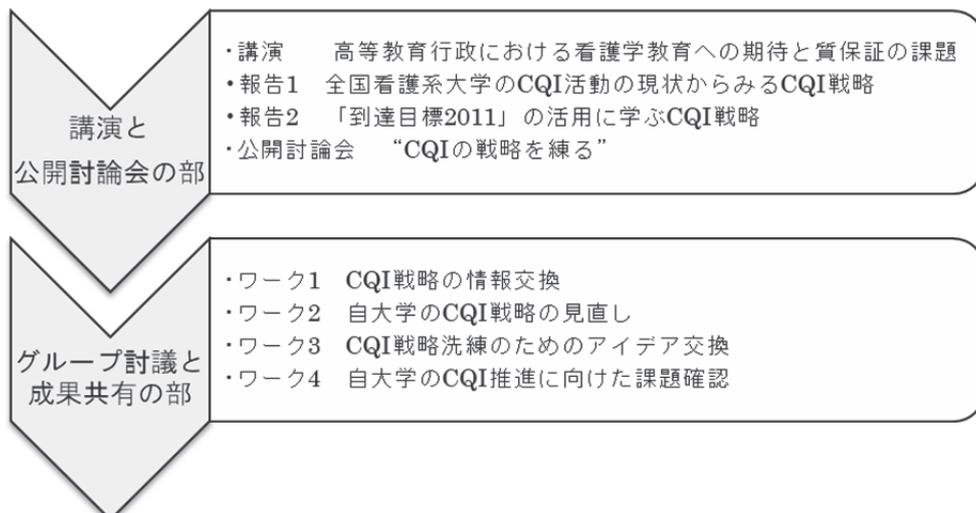
1. 期間：平成29年10月26日（木）～10月27日（金）
2. 会場：千葉大学 けやき会館
3. 主催：看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター  
協力：一般社団法人 日本看護系大学協議会
4. テーマ：看護学教育の自律的・継続的質改善（CQI）の戦略を練る
5. 主なプログラム

##### 目的

看護学教育の継続的質改善（CQI）を推進するための考え方や方法について学び、自大学のCQIの戦略を練る

##### 目標

- (1) 高等教育行政の概況や全国看護系大学のCQI活動を知り、自大学のCQI戦略をマクロから検討する視点を獲得する。【講演と報告】
- (2) 看護系大学のCQIの課題、CQIの推進要因・阻害要因、CQI戦略をどう推進するかについての討論を聴き、自大学のCQI戦略について考える。【公開討論会】
- (3) さまざまなCQI戦略について情報交換し、自大学のCQIを再考する。【ワーク1】
- (4) 各大学のCQI戦略を検討し、自大学のCQI戦略を見直す。【ワーク2】
- (5) CQI戦略のアイデア交換を通して、自大学のCQI戦略洗練のヒントを得る。【ワーク3】
- (6) CQI戦略における共通性を探り、自大学のCQI推進に向けた課題を確認する。【ワーク4】



### <グループ討議のテーマ>

#### A：トップダウン CQI 戦略

組織の管理的立場にある者から教員に働きかけて CQI を推進する戦略を検討する。

#### B：FD 中心 CQI 戦略

FD 企画を通して、教員の能力開発を行うことから CQI を推進する戦略を検討する。

#### C：日常教育実践 CQI 発見戦略

日常の教育実践から CQI 活動となっているものを見出し、CQI 戦略として検討する。

#### D：ボトムアップ CQI 戦略

一教員の立場から、組織全体に働きかけて CQI を推進する戦略を検討する。

## 6. 参加要件

講演と公開討論会の部：参加要件なし。

全日程：看護系大学において、組織的な教育の質改善(CQI)を推進する教員。

原則として、准教授以上とし、以下の①～④を参加要件とする。

- ①全日程に参加できる。
- ②自大学の CQI に関する情報を収集し、参加前 web チェックに回答できる。
- ③配置されたグループのテーマに沿って、CQI 戦略を構想し、参加者と共有することができる。
- ④グループ討議中に、自大学の CQI の戦略を練り、意見交換できる。

## 7. 参加者

全参加者（ワーク知るの部のみ参加者含む） 105 機関 153 名

全日程参加者 65 大学 67 名

## 8. 実施体制

講演者・報告者（発表順）

斉藤 しのぶ 文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官  
吉田 澄恵 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 特任准教授  
黒田 久美子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授

公開討論会（司会・パネリスト）

吉本 照子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター センター長・教授  
上泉 和子 一般社団法人 日本看護系大学協議会 代表理事  
公立大学法人 青森県立保健大学 理事長／学長  
小笠原 正明 北海道大学名誉教授、前大学教育学会会長、元筑波大学特任教授  
高田 早苗 日本看護学教育評価機構（仮）設立準備委員会委員長  
日本赤十字看護大学 学長  
深田 美香 鳥取大学医学部保健学科 教授  
村上 生美 森ノ宮医療大学 副学長 保健医療学部看護学科長

#### ファシリテータ（グループ番号順）

吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
深田 美香	鳥取大学医学部保健学科	教授
銭 淑君	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
石橋 みゆき	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
谷本 真理子	東京保健医療大学	教授
野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
杉田 由加里	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
吉田 澄恵	千葉大学大学院看護学研究科	特任准教授

#### 千葉大学運営組織

大学院看護学研究科長 中村 伸枝 教授

センター教員会議および実行委員会 （◎ センター長・企画責任者 ○実行委員長）

◎吉本 照子 教授 ○野地 有子 教授 手島 恵 教授 和住 淑子 教授

黒田 久美子 准教授 銭 淑君 准教授 杉田 由加里 准教授

田中 裕二 准教授 吉田 澄恵 特任准教授 飯野 理恵 助教

## 9. 実施概要

### <講演と公開討論会の部>

1 日目は、中村伸枝研究科長の挨拶により始まり、文部科学省高等教育局医学教育課の斉藤しのぶ専門官から、「高等教育行政における看護学教育への期待と質保証の課題」と題した講演があった。続いて、当センターより、「全国看護系大学の CQI 活動に学ぶ CQI 戦略」と『到達目標 2011』に学ぶ CQI 戦略」と題する2つの報告を行った。その後、午後から、初の試みとして公開討論会を実施した。この公開討論会は、仮想大学2校の CQI 戦略を練る模擬公開会議という形式で実施し、ひとりの教員が、個人として声をあげ、話し合う場を、公式、非公式にもち、組織としての取り組みにどうつなげていくかが議論された。

### <グループ討議と成果共有の部>

続いて、全日程参加者が参加するグループ討議と成果共有の部では、まず、1日目の午後、参加前 web チェックや、<講演と公開討論会の部>をもとに、グループで、さまざまな CQI 戦略に関する情報交換を行い、他グループの討議内容を知り、自大学の CQI を再考した（【ワーク 1】）。

2 日目は、午前中に、グループで各参加者の自大学の CQI 戦略について検討した（【ワーク 2】）。午後からは、CQI 戦略を練る上で重要だと考えたことを発表しあい、全体でアイデア交換を行い（【ワーク 3】）、その後、CQI 戦略における共通性を探り、自大学の CQI 推進に向けた課題を確認した（【ワーク 4】）。

以上を通して、日常の教育の質改善を継続的に行うための教員のエネルギーの重要性、看護系大学を取り巻く社会を俯瞰して見方を転換することでみえてくる多様な CQI の活用資源、実習先や地域社会の資源を互恵的な関係の中で活用するしくみづくり、個々の教員の力の発揮を促すトップの役割、過渡期の今必要な数十年先の先見性と一人ひとりの不寛容の克服などについて、再確認や発見があった。

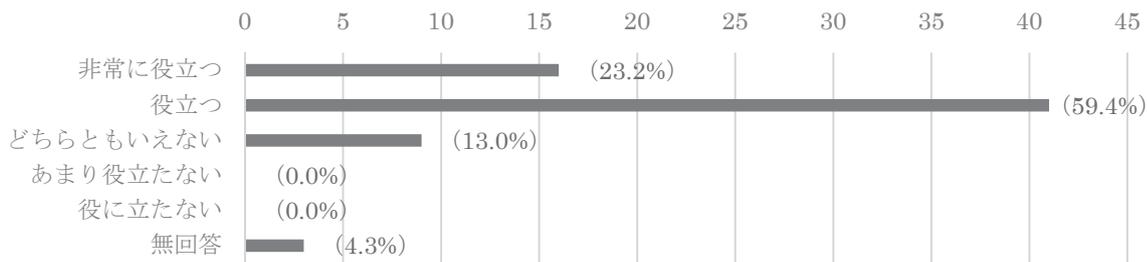
## 10. ワークショップ終了後の評価

参加者アンケートは、概ね好評で、自大学での CQI 戦略を練るという課題をもつ全日程参加者からは、各大学の CQI 戦略を考える上で、タイムリーな情報や自大学に反映できる情報が得られたこと、様々な背景の教員間での交流から得られた共通する課題や取り組みの共有があったことが示された。ただし、講演と公開討論会の部のみの参加者からは、文部科学省からの情報を得る場としての期待が大きいことがうかがわれた。(詳細は、平成 29 年度看護学教育ワークショップ報告書)

### ■講演と公開討論会の部のみの参加者による評価

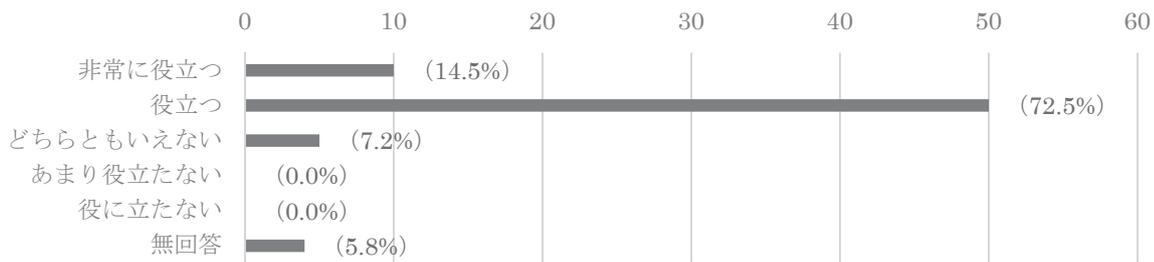
- 文部科学省の講演内容は、役に立ちましたか。

(N=69)



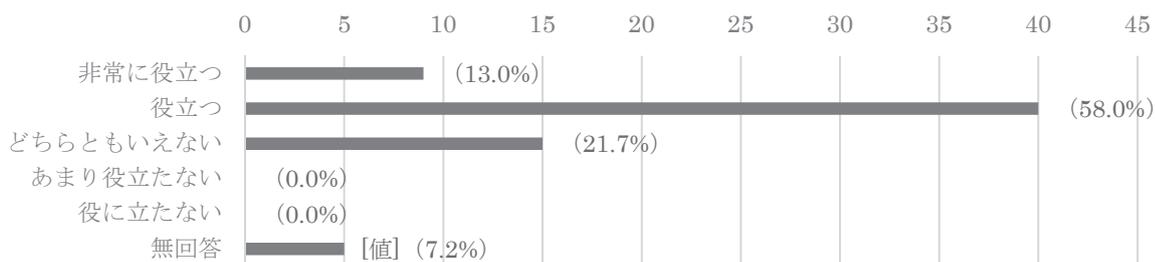
- 報告 1(全国看護学系大学の CQI 活動の現状からみる CQI 戦略)は、役立ちましたか。

(N=69)



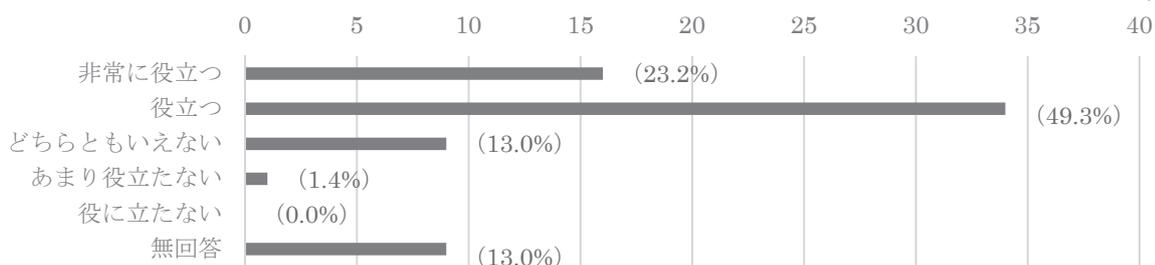
- 報告 2(「到達目標 2011」の活用に学ぶ CQI 戦略)は、役立ちましたか。

(N=69)

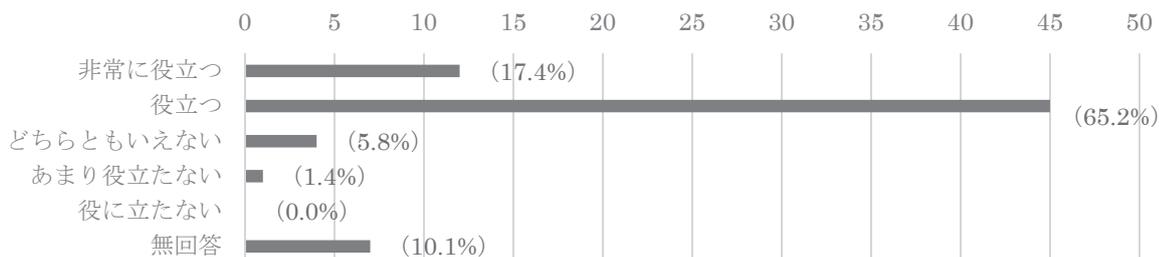


- 公開討論会は、役立ちましたか？

(N=69)

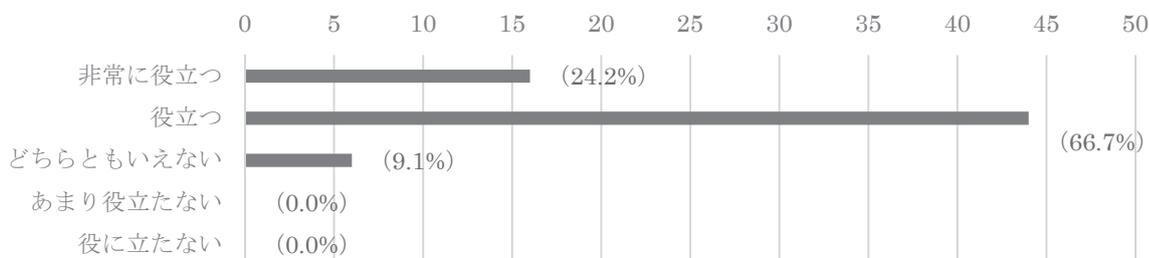


- ・ <講演と公開討論会の部>全体に対するあなたの満足度はどの程度ですか？ (N=69)

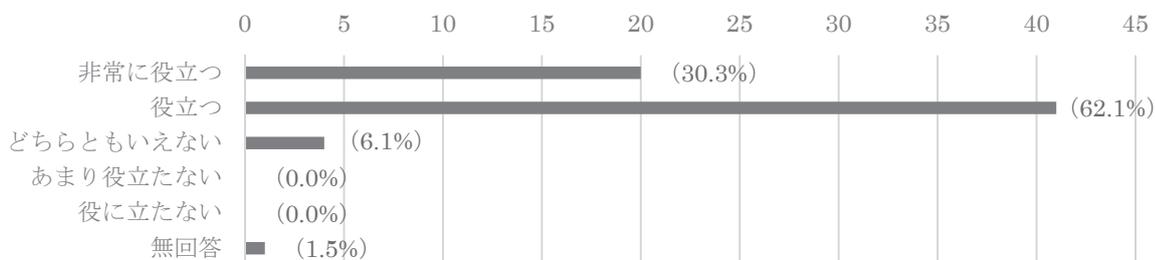


■全日程参加者による評価

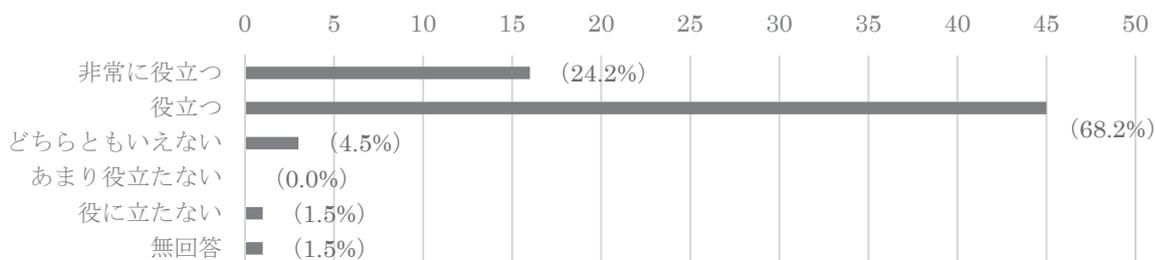
- ・ 文部科学省の講演内容は、役に立ちましたか。



- ・ 報告1(全国看護学系大学のCQI活動の現状からみるCQI戦略)は、役に立ちましたか。 (N=66)

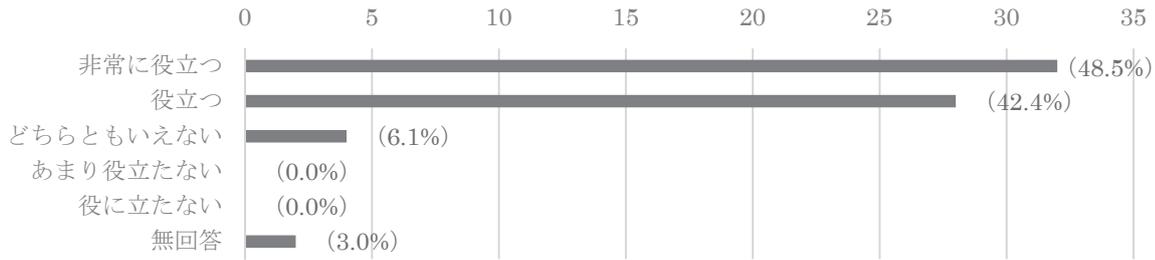


- ・ 報告2(「到達目標2011」の活用に学ぶCQI戦略)は、役に立ちましたか。 (N=66)



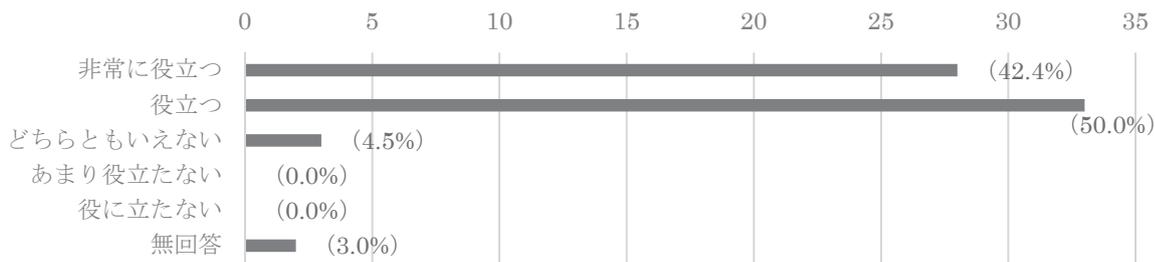
・ 公開討論会は、役立ちましたか？

(N=66)

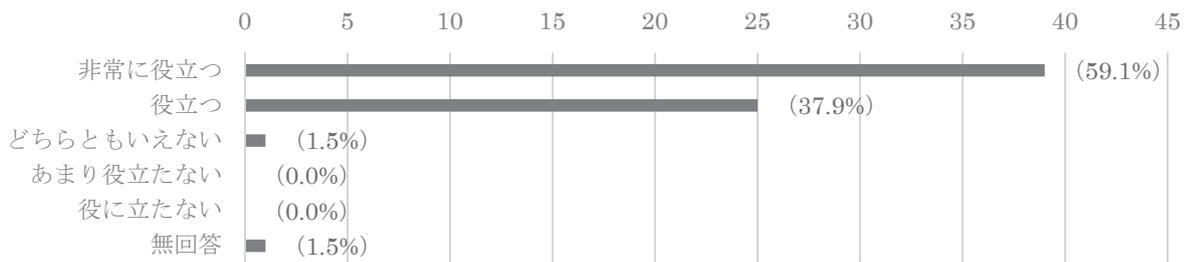


・ <講演と公開討論会の部>全体に対するあなたの満足度はどの程度ですか？

(N=66)

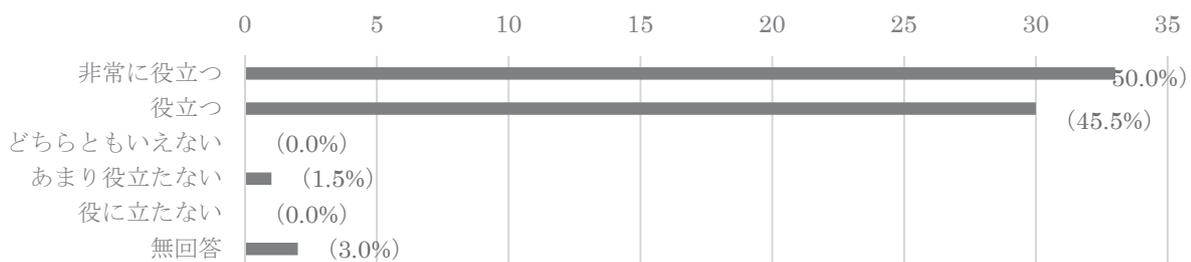


・ グループ討議は、貴学の CQI 戦略を練るうえで役立ちましたか。



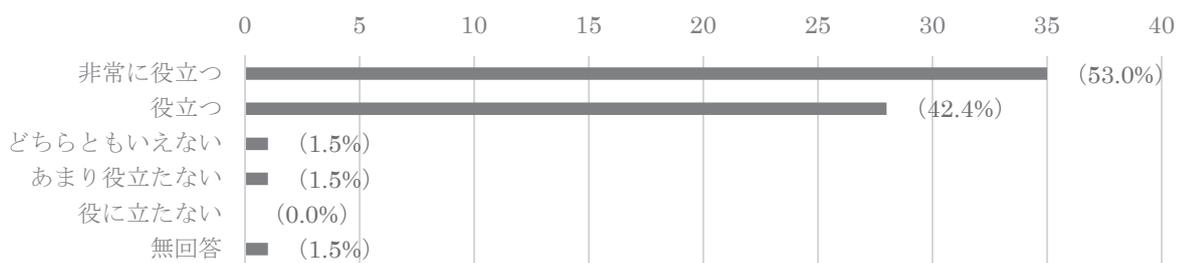
・ 成果共有は、貴学の CQI 戦略を練るうえで、役立ちましたか。

(N=66)



・ 今年度のワークショップ全体に対するあなたの満足度はどの程度ですか？

(N=66)



## 5) 看護系大学FD企画者研修

### (1) 研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が高まっている。毎年約10校のペースで大学の新設が続く中、看護系大学教員には、変化する看護職の役割を踏まえ、看護を学問として体系的に教授する能力が強く求められている。

平成19年の大学設置基準の改正以来、各看護系大学では、すでにさまざまなファカルティ・ディベロップメント(以下FDとする)が行われているが、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合ったFDを体系的に企画・実施・評価することのできるFD企画者養成へのニーズが、ますます高まっている。

そこで、当センターでは、平成29年度からの新規の事業として、「看護系大学FD企画者研修」を開催することとした。本研修の目的は、組織分析を通して自大学の課題を特定し、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合った体系的なFDを企画・実施・評価できるFD企画者(FDer)としての能力を身につけることである。

なお、本研修は、当センターが平成25年度から独自事業として実施してきた、看護学教育指導者研修(アドバンスコース)を発展させて実施するものである。本研修では、当センターがこれまでに開発した、「看護系大学におけるFDマザーマップ®」およびそれに関連する各種FDコンテンツの活用方法についても学ぶことができるようにし、教員の能力開発を通じた教育の質改善に自律的に取り組む意思のある看護系大学教員を対象とした。

### (2) 研修内容

(1) 期 間：以下の3期に分けて実施

#### 研修Ⅰ

平成29年7月23日(日)10:00~16:00

#### 研修Ⅱ

平成29年8月23日(水)~8月25日(金)

#### 研修Ⅲ

平成30年3月11日(日)13:00~16:00

(2) 内 容：研修プログラムを表1に示す。

(3) 受講者：5大学10名(各大学2名)

(4) 受講料：1名につき15,000円(消費税を含む)

表1 平成29年度 看護系大学FD企画者研修プログラム

研修・日時	プログラム	時間
研修 I 平成29年7月23日(日) 10:00～16:00	10:00～10:10 センター長挨拶、オリエンテーション 10:10～11:30 参加者自己紹介 <b>【FD企画検討に活用できる当センターからの情報提供】</b> ・看護系大学におけるFDの現状と課題 ・FDマザーマップ®紹介 ・FDマザーマップ®を活用した自大学の現状、FDニーズの特定の例 ・看護教育・実践連携評価ツール紹介 ・FD支援データベース紹介 11:30～12:30 昼食・休憩 12:30～15:10 グループ討議 <b>【自大学の現状を踏まえた本質的FD課題の解明】</b> ・自大学の現状を報告し、参加者間で多面的に分析する ・自大学の現状の背後にはどのようなFDニーズが潜んでいるのかについて検討する ・午前中の当センターからの情報提供等を参考に、自大学の現状を踏まえた本質的なFD課題の特定に向けて、他に収集すべきデータがないか検討する ・自大学のFDニーズを踏まえた、実行可能性・有用性のより高いFD企画するために、研修Ⅱまでに行うべきことを明らかにする 15:10～15:20 移動・休憩 15:20～15:50 <b>【本質的FD課題の解明に向けた気づきの共有】</b> グループ討議成果の共有(1大学5分×5大学) 15:50～16:00 窓口教員の決定 研修Ⅱオリエンテーション	5
	8月23日(水) 10:00～10:30 研修Ⅱオリエンテーション 10:40～15:00 看護学教育指導者研修講義聴講 「看護高等教育行政の動向」「看護学教育の基礎」	15

<p>研修Ⅱ 平成29年8月23日(水) ～8月25日(金)</p>	<p>15:10～16:40 【研修Ⅰ後の進捗状況の報告と研修Ⅱの位置づけの明確化】 8月24日(木) 9:00～10:30 看護学教育指導者研修講義聴講 「臨地実習指導の基礎」 10:40～16:40 「自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション」にファシリテーターとして参加 8月25日(金) 9:00～16:40 「臨地実習場面の教材化」にファシリテーターとして参加 16:50～17:30 【ファシリテーション経験を踏まえて考える自大学の課題解決のためのFD企画】 ファシリテーターとしての経験を踏まえて自大学と臨地実習施設との連携・協働の在り方を含む自大学のFD課題について再検討し、自大学のFDニーズを踏まえたFD計画立案に向けた方向付けを行う。</p>	
<p>研修Ⅲ 個別支援 (研修Ⅱ終了後～随時)</p> <p>成果報告会 平成30年3月11日(日) 13:00～～16:00</p>	<p>【FD企画書の作成】(自大学での実践) ・組織の現状分析を通して、自大学の課題およびFDニーズを特定する。 ・看護および看護学の特徴を踏まえ、自大学の実情に即した、中長期的な計画を含むFD計画を立案する。 ・次年度に向けて、自大学で実行可能なFD企画書(フォーマット提示)を作成し、2月末日までにセンター事業支援係宛に提出する。 (FD企画書の作成までのプロセスは、窓口教員を通じて、当センターからの個別支援を受けることができる。)</p> <p>平成30年3月11日(日) 成果報告会 13:00～～16:00 各大学が、現状分析～FD企画書作成までの一連のプロセスについて報告する。 自大学の実情に見合った体系的なFDを企画・実施・評価するFD企画者としての能力を評価し、今後の能力開発の方向性を定める(全体討議) 修了証書手交</p>	<p>5</p>
<p>計</p>		<p>25</p>

### (3) 実施・評価

1 大学 2 名 1 組、計 5 大学 10 名の定員で受講者を募集としたところ、20 大学を超える応募があり、研修内容と課題の合致する 5 大学 10 名を選考して実施した。

研修Ⅰは、FD マザーマップ<sup>®</sup>等の看護学教育の体系的FDに資する情報提供の後、各大学の組織状況とそれに応じたFD企画についてディスカッションを行い、企画立案を課題とした。研修Ⅱは、看護学教育実習指導者研修へのファシリテーター参加形式の演習とし、前後に立案中のFD企画についての実施方略を含めた情報交換を行った。自大学の地域貢献を確認する調査実施を視野に入れた集合型研修、自立的キャリア発達に貢献する教員個別のFD支援企画案など、多様なFD企画が検討された。研修Ⅲでは計画、実施、評価の経過報告を行い、FDerとしての能力開発へのフィードバックを行った。



写真 センター教員と意見交換



写真 看護学教育指導者研修にて  
ロールプレイングに参加



写真 研修Ⅲ成果報告会の様子

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

〔自大学・学部・学科等の実情に即した体系的なFDを企画・実施・評価する上で、活用したことや学びになったと思われたこと〕

- ・何よりもFDだという自覚を持つ事の大切さを学んだ。それによって議論や評価の方向

性が変わってしまうのだという事を体感できたことが一番の学びであった。

- ・自大学の現状を見る視点・目指す目標が明確になったと思う。分析力の大切さを実感できた。

- ・組織分析の過程において、自大学の強みに気付くことが大切であることを学んだ。

[本研修への参加によって、所属大学・学部・学科等の教員組織に影響があったと思われること]

- ・日常の困り事を困り事で終わらせるのではなく、FDの材料となり得るのだという事を体感してもらえたのではないか。

- ・組織のトップに組織分析の結果を提出する事でそれぞれが考えている課題を共有できた。

- ・助教という役職であったが、自大学がFDのリーダーとして支えてくれた。そして助教でも組織のリーダーになること見守ってくれたため、他の教員にも勇気が根づいたと思う。

[本研修に参加した他大学の教員や、他大学の状況から学んだこと]

- ・大学毎に抱えている課題・現状は異なっており、FDも独自のものにしていく必要がある。一方、看護学を発展させたい、よい看護職を育てたいという点では共通の目標があるので、共感しながらすすめていくことができた。

- ・自大学で現在困難と思っていることを5~6年前に経験し、取り組まれていたこと。

- ・若い教員の方が頑張っていらっしゃる姿を見てとても励みになった。

#### (4) 今後の課題

今年度新規に企画した研修であったが、定員を大幅に超える20大学以上から応募があったことを考えると、現在の看護系大学教員の研修ニーズに合致した研修であったと評価できる。また、研修評価アンケートの結果から、自大学の実情に見合った体系的なFDを企画・実施・評価するFD企画者としての能力を評価し、今後の能力開発の方向性を定める、という研修の目的は達成できたと考える。特に、自大学の組織分析を丁寧に行う研修であったことが、成果が上がった理由であると思われる。

現在のセンター教員のマンパワーから考えると、研修の質を維持しつつ定員枠を拡大することは困難であり、しばらくは、現在のままの実施形態を続けることとしたい。今後は、当センターの事業である看護学教育ワークショップや看護系大学へのFD個別コンサルテーションと連動させるなどして、看護系大学教員の研修ニーズに応えていきたい。

### Ⅲ. 資料

#### 1. 教育・研究活動実績

2017年4月から2018年3月

#### 研究活動

##### [原著]

1. 清水みどり、吉本照子、杉田由加里：摂食嚥下機能低下を認める特別養護老人ホーム入所者の経口摂取支援のための看護職役割行動指標の作成 看護一介護連携に着目して、千葉看会誌，23(1)，11-20，2017
2. 上原たみ子、吉本照子、杉田由加里：高齢者虐待に対する地域包括支援センター看護職の支援行動指標の開発，千葉看会誌，23(1)，33-42，2017.
3. 炭谷大輔，野地有子，大島紀子：我が国の保健医療福祉におけるゲーミフィケーションの活用と課題，日本健康科学学会誌，33(1)，51-61，2017.
4. 大原裕子，瀬戸奈津子，柴山大賀，黒田久美子，飯田直子，金子佳世，田井さやか，照沼則子，任和子，法月章子，畑中あかね，森加苗愛：認定教育施設における外来糖尿病教室の実態調査 開催スケジュールならびに内容と実施担当者に焦点をあてて，日本糖尿病教育・看護学会誌，21 (2)，119-129，2017

##### [招聘講演]

1. Ariko Noji, Akiko Nosaki, Dale Glaser, Lucia Gonzales: Classifications of cultural competence among Clinical Nurses in Japan using Latent Profile Analysis, International Healthcare & Patient Safety Conference, Dubai, UAE, November 06-07 2017.

##### [シンポジウム]

(主 催)

1. 野地有子：キックオフ国際シンポジウム 2017，聖路加国際大学 日野原ホール，2017.
2. 野地有子：Dr. Anil Bankar 氏による国際セミナー開催：「An Emerging trends in Medical Tourism: Challenges and opportunities」，千葉大学附属病院セミナー室3，2017.
3. 「Key Learning outcome of Medical Tourism Education for nursing program」，千葉大学看護学研究科，2017.

(シンポジスト)

4. 野地有子：臨床における管理栄養士の役割－患者アウトカムを出すために看護管理の視点から：コア業務とチーム医療－，第17回日本健康・栄養システム学会抄録集，33，2017.
5. 野地有子：文化の多様性に配慮したケア提供のための看護ガイドライン開発に向けて，

聖路加国際大学 日野原ホール(大村進・美枝子記念聖路加臨床学術センター), 2017.

6. 野地有子: 地域包括ケアと高齢者の栄養ケア・マネジメント-生涯にわたる食べることの支援-, 第39回日本臨床栄養学会総会プログラム・講演要旨集, 146, 2017.

#### [学会発表]

1. 黒田久美子, 吉田澄恵, 櫻井友子\*, 吉本照子, 和住淑子, 野地有子, 錢淑君: 看護学教育の質確保のための取り組みと課題-「到達目標 2011」の活用実態等に関する全国調査報告 2 報, 第 37 回日本看護科学学会学術集会予稿集 PDF. 2017.  
<http://convention.jtbcom.co.jp/jans37/> 最終アクセス 20171221  
\*2016年3月まで千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践センター
2. 和住淑子, 吉本照子, 吉田澄恵, 野地有子, 黒田久美子, 錢淑君: 看護系大学における教育の質改善への取り組みの特徴と背景要因との関連, 第 37 回日本看護科学学会学術集会予稿集 131. 2017.
3. 吉田澄恵, 吉本照子, 黒田久美子, 和住淑子, 野地有子, 錢淑君, 櫻井友子: 全国の大学における看護学教育の継続的質改善 (CQI) 活動の実態と促進要因. 第 37 回日本看護科学学会学術集会予稿集, 43. 2017.
4. 小熊亜希子, 吉本照子, 杉田由加里: 介護老人保健施設入居者の身体状態に即した肺炎ケアを促す看護モデルの開発. 日本老年看護学会第 22 回学術集会抄録集, 167, 2017.
5. 水村純子, 吉本照子: 地域包括支援センターにおける多職種協働を促すためのケースカンファレンス基準の活用 活用のための研修プログラムの作成, 実施および検証. 第 22 回日本在宅ケア学会学術集会抄録集, 217, 2017.
6. 小林路世, 小粥美香, 小林康司, 松本和史, 野地有子, 竹谷英之: 成人血友病患者に対する疾患と治療についての確認シートの活用, 第 39 回日本血栓止血学会学術集会抄録集, 252, 2017.
7. 小林路世, 小粥美香, 小林康司, 松本和史, 野地有子, 竹谷英之: 成人血友病患者に対する疾患と治療についての確認シートの活用とセルフケア能力の評価, 第 39 回日本血栓止血学会学術集会抄録集, 225, 2017.
8. 野地有子, 小塚華子, 野本尚子, 佐藤由美, 鶴岡裕太, 岡本美孝: ICU 病棟において看護師が管理栄養士から学ぶべき視点と技術そして連携-救急領域の重症患者に対する栄養管理から-, 第 17 回日本健康・栄養システム学会誌, 82, 2017.
9. 中野香名, 山本実紗, 野本尚子, 野地有子, 古川勝規, 岡本美孝: 急性期病院の管理栄養士病棟配置体制における栄養管理時間の検討, 第 17 回日本健康・栄養システム学会誌, 80, 2017.
10. 谷井真弓, 一色裕美, 小粥美香, 成田初子, 久原みな代, 小林康司, 大島紀子, 野地有子: 周術期看護の質向上の取り組み-周術期看護の業務の効率化と見える化-, 第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 248, 2017.

11. 水野雅子, 増渕美恵子, 野地有子, 大島紀子: 急性期病院における退院支援に関する文献検討, 第 21 回日本看護管理学会学術集会抄録集, 320, 2017.
12. 橋爪朋子, 野地有子: 災害看護教育の研修方法と効果測定に関する研究の動向, 日本健康科学学会第 33 回学術大会抄録集, 211, 2017.
13. 野地有子, 野崎章子, 望月由紀, 炭谷大輔: 日本の病院看護師のカルチャラル・コンピテンスと属性背景因子の関連, 日本健康科学学会第 33 回学術大会抄録集, 212, 2017.
14. 炭谷大輔, 野地有子, 野崎章子, 望月由紀: 外国人患者看護ケア能力向上に向けた看護職教育アプリ開発, 日本健康科学学会第 33 回学術大会抄録集, 213, 2017.
15. 松田美智代, 野地有子: インストラクショナル・デザインを活用した研修プログラムの開発と評価～院内カンファレンス活性化に向けたファシリテーションスキルの習得～, 日本健康科学学会第 33 回学術大会抄録集, 214, 2017.
16. 大島紀子, 野地有子: 新入社員に対する睡眠習慣と健康づくりに関する検討, 日本健康科学学会第 33 回学術大会, 215, 2017.
17. Masami Kase, Ariko Noji, Michiyo Matsuda: Nurses' Gathering Information of Patients' Life for Post-discharge Support at an Acute Care Hospital, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
18. Ariko Noji, Mari Kondo, Sayaka Kotera, Akiko Mizobe: Faculty Development for Global Education in Nursing -Faculty members' positive experiences-, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
19. Tomoko Hashizume, Kazuko Komori, Toru Hirokawa, Mitsuru Uekado, Hiroshi Ustunomiya, Satoshi Katsuyama, Ariko Noji: Developing a Questionnaire for a Factual of the Kumamoto Earthquake: Working Toward a Hospital Support System, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
20. Noriko Oshima, Ariko Noji: Health promotion for new employees Needs assessment of dietary and exercise habits, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
21. Mika Kogayu, Michiyo Kobayashi, Kazuhumi Matsumoto, Koji Kobayashi, Hideyui Takedani, Ariko Noji: Support for adult patients with hemophilia from the lifecycle perspective ~Voices of hemophilia nurses~, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
22. Masako Mizuno, Mieko Masubuchi, Ariko Noji: Literature review of discharge support at Japanese acute care hospital, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.

23. Akiko Nosaki, Ariko Noji: Difficulties in delivering nursing care to foreign patients among Japanese nurses and their attributes: text mining approach, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, Bangkok, Thailand, 20-22th, Oct, 2017.
24. 野崎章子, 野地有子: 日本人看護師の外国人患者への看護ケア提供における困難と属性の関連: テキストマイニング結果より, 第 37 回日本看護科学学会学術集会電子抄録集, 2017.
25. 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか, 溝部昌子: グローバル時代の看護系大学における FD とキャリア支援—国際活動委員会の教員の経験の展開から—, 第 37 回日本看護科学学会学術集会電子抄録集, 2017.
26. Ariko Noji, Akiko Nosaki, Dale Glaser, Lucia Gonzales, Daisuke Sumitani: Associations between Japanese version Caffrey Cultural Competence in Healthcare Scale (J-CCCHS) score among Japanese clinical nurses and background characteristics, 21th EAFONS & 11th INC, 1/11-12, 2018, Seoul, Korea.
27. Ayako Aihara, Ariko Noji: The Current status of Visiting Nursing system in community care for the elderly: Japan, 21th EAFONS & 11th INC, 1/11-12, 2018, Seoul, Korea.
28. 野地有子, 野崎章子: わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンスに関する研究—潜在的な分析から—, 第 8 回日本看護評価学会学術集会, 東京都・東京工科大学蒲田キャンパス, 平成 30 年 3 月 5 日~6 日
29. 黒田久美子, 清水安子, 内海香子, 正木治恵, 錢淑君: 認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族への援助指針の開発. 日本糖尿病教育・看護学会誌.21 巻特別号, 100, 2017
30. 清水安子, 内海香子, 黒田久美子, 脇幸子, 中尾友美, 吉田多紀, 瀬戸奈津子, 正木治恵: 糖尿病患者セルフケア能力測定ツールを看護実践に活用してみませんか. 日本糖尿病教育・看護学会誌.21 巻特別号, 104, 2017
31. 青木美智子, 高橋良之, 黒田久美子, 正木治恵: 自律神経障害を有する糖尿病患者が自分らしく生きるプロセスを支える外来看護援助ガイドの作成. 日本糖尿病教育・看護学会誌.21 巻特別号, 168, 2017
32. 森山美知子, 任和子, 黒田久美子, 古賀明美, 金子佳世, 柳井田恭子, 水野美華, 肥後直子, 古山景子, 飯田直子, 高橋良幸, 中元美恵: 平成 30 年度診療報酬改訂と糖尿病腎症重症化予防の動き. 日本糖尿病教育・看護学会誌.21 巻特別号, 81, 2017
33. 餘目千史, 木下由美子, 黒田久美子, 森加苗愛: 指定交流集会 研究ビギナーのための発表の基礎. 日本糖尿病教育・看護学会誌 21 巻特別号, 80, 2017
34. 大原裕子, 河井伸子, 正木治恵, 坂本明子, 黒田久美子, 石井優香: 高齢者ケアの継続・連携に関するチーム医療を促進する看護師が行っているコーディネート機能. 第

- 37 回日看科会学術集会プログラム集, 94, 2017
35. 河部房子, 和住淑子, 錢 淑君: 自己の看護実践体験に対する看護学生のリフレクションの特徴. 日本看護学教育学会誌第 27 卷 (日本看護学教育学会第 27 回学術集会講演集), 172, 2017.
  36. Shu Chun Chien, Yoshiko Wazumi, Toshie Yamamoto, Takeshi Matsumoto, Takashi Maeda, Tomoko Katagiri, Akiko Nagata, Fusako Kawabe : Program for promoting self-management of health status for nursing students based on oriental concepts. Creating Healthy Work Environments- The conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 18 March 2017, Indianapolis, Indiana USA.
  37. Toshie Yamamoto, Shu Chun Chien, Takeshi Matsumoto, Yuka Kanai : Study of promoting health management for nurses working at a highly advanced treatment medical center. Creating Healthy Work Environments- The conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 18 March 2017, Indianapolis, Indiana USA.
  38. Yoshiko Wazumi, Toshie Yamamoto, Shu Chun Chien : 'Analogy' as methodology in solving modern day problems by learning from F. Nightingale's work. The conference of Sigma Theta Tau International Honor Society of Nursing. 27 July 2017, Dublin, Ireland.
  39. 和住淑子, 齊藤しのぶ : 看護の大学教育進展の過程に見る「看護学の体系性」の自覚とその「社会的認知」の変化. 日本看護学教育学会誌第 27 卷 (日本看護学教育学会第 27 回学術集会講演集), 262, 2017.
  40. 和住淑子 : ナイチンゲールの理論形成と英国産業革命. ナイチンゲール研究学会第 38 回研究懇談会, 2017.
  41. 坂本真南, 辻守栄, 和住淑子 : ICU 多職種チームにおける早期リハビリテーションの判断と介入に関する実態調査. 日本救急看護学会雑誌, 19 (3), 267, 2017.
  42. 湯浅美千代, 錢 淑君 : エンドオブライフにおける文化的ケア-文化看護学会第 8 回学術集会 分科会 I - . 文化看護学会誌, 9 (1), 2, 2017.
  43. 丸山香織, 片桐智子, 錢 淑君, 山岸仁美, 戸田 肇, 高橋幸子, 河部房子, 齊藤しのぶ, 前田 隆 : 統合実習の評価基準構築にむけた統合実習に関する文献の動向. 日本看護学教育学会誌第 27 卷 (日本看護学教育学会第 27 回学術集会講演集), 196, 2017.
  44. 片桐智子, 丸山香織, 錢 淑君, 山岸仁美, 戸田 肇, 高橋幸子, 河部房子, 齊藤しのぶ, 前田 隆 : 「看護基礎教育課程における統合実習」実践事例その 1 : 看護のアート&サイエンスの育成を目指して. 日本看護学教育学会誌第 27 卷 (日本看護学教育学会第 27 回学術集会講演集), 197, 2017.
  45. 錢 淑君, 片桐智子, 丸山香織, 山岸仁美, 高橋幸子, 河部房子, 齊藤しのぶ, 前田

隆：「看護基礎教育課程における統合実習」実践事例の検討その2：ナースサイエンティストの育成を目指して．日本看護学教育学会誌第27巻（日本看護学教育学会第27回学術集会講演集），197，2017．

46. 高橋幸子，片桐智子，錢淑君，山岸仁美，戸田 肇，河部房子，斉藤しのぶ，前田隆，嘉手苺英子：「看護基礎教育課程における統合実習」実践事例の検討その3：ナースサイエンティストの育成を目指して．日本看護学教育学会誌第27巻（日本看護学教育学会第27回学術集会講演集），198，2017．

#### [報告書]

1. 吉田澄恵，吉本照子，和住淑子，野地有子，黒田久美子，錢淑君：文部科学省特別経費（プロジェクト分）．看護学教育の継続的質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）モデル開発と活用推進プロジェクト，大学における看護学教育の継続的質改善（CQI）活動と背景要因に関する研究報告書，2017．
2. 吉本照子，野地有子，和住淑子，黒田久美子，錢淑君，吉田澄恵：学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発（平成27年度－29年度）最終報告書
3. 吉本照子，野地有子，和住淑子，黒田久美子，錢淑君，吉田澄恵：学士課程における看護学教育の質保証・質改善に向けて外部指針を活用する。－自大学の過去・現在・未来をみつめて－（平成27年度－平成29年度）パンフレット
4. 吉本照子，野地有子，手島 恵，和住淑子，黒田久美子，錢淑君，杉田由加里，田中裕二，飯野理恵，吉田澄恵\*：平成29年度 看護学教育研究共同利用拠点 看護学教育ワークショップ報告書－看護学教育の自律的・継続的質改善（CQI）の戦略を練る．看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター，2017．（\*平成29年3月まで当センター特任准教授）
5. 高橋在也，吉本照子，石丸美奈，長江弘子，坂井志麻，原沢のぞみ，小池愛弓，渡邊賢治，足立智孝，清水直美，岩城典子，市民を対象としたエンド・オブ・ライフ教育のプログラム及び教材開発．公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団 2015年度（後期）一般公募「在宅医療研究への助成」完了報告書，2017．
6. 杉山みち子，小山秀夫，野地有子ほか：『認知症対応型共同生活介護における栄養管理のあり方に関する調査研究事業』報告書，平成29年度厚生労働省老人保健事業推進等補助金（老人保健健康増進等事業分），日本健康・栄養システム学会，2018年3月．
7. 野地有子：公的病院におけるELNEC教育プログラムの開発 ELNEC高齢者版モジュールの事例 コンテンツ事例集，附属看護実践研究指導センター，2018年3月．
8. 野地有子，溝部昌子，近藤麻理，小寺さやか，野崎章子，炭谷大輔：10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書 Vol.2，附属看護実践研究指導センター，2018年3月．

9. 萱間真美, 宮本千恵子, 和住淑子, 宮林郁子, 高見沢恵美子, 菅原京子, 石橋みゆき, 五十嵐ゆかり: 日本看護系大学協議会平成28年度事業活動報告書「看護学教育質向上委員会」。一般社団法人日本看護系大学協議会, 2017.

[総説・短報・実践報告・資料・その他]

1. 柳澤尚代, 菅原京子, 清水洋子, 吉本照子: 保健師活動の質向上に向けた保健師記録に関する文献的考察及び課題, 山形保健医療研究, 20, 1-10, 2017.
2. 小熊亜希子, 吉本照子, 杉田由加里: 介護老人保健施設における肺炎の罹患予防、発見、治療開始後の取り組みと看護の課題. 千葉看会誌, 23(1), 63-70, 2017.
3. 柳澤尚代, 菅原京子, 清水洋子, 吉本照子: 時代が求める!保健師記録の仕組みづくり(第1回) 地域包括ケアの質を高める保健師記録の仕組みづくり 保健師記録をめぐる現状と連載のねらい, 保健師ジャーナル, 73(10), 856-863, 2017.
4. 清水洋子, 波田野房枝, 柳澤尚代, 吉本照子, 菅原京子: 時代が求める!保健師記録の仕組みづくり(第2回)(事例1)相模原市 記録の質保証を目指した取り組み, 保健師ジャーナル, 73(11), 944-950, 2017.
5. 吉本照子, 池田裕子, 藤崎京子, 柳澤尚代, 清水洋子, 菅原京子: 時代が求める!保健師記録の仕組みづくり(第3回)長岡京市の取り組み 電子化記録の活用による母子保健サービスの質保証, 保健師ジャーナル, 73(12), 1042-1049, 2017.
6. 吉本照子, 飯岡由紀子, 小川純子, 松岡千代, 遠藤和子: 「配慮が必要な学生」の学びにつなげる対応 臨地実習における教育上の調整を考える 第12回(最終回) 学生の学びを促す対応に向けたFDの考え方と試み, 看護教育, 58(12), 1050-1056, 2017.
7. 別府朋子, 吉田澄恵: 外来看護師が行う初回下肢ギプス固定患者への直接ケアと患者教育の実態調査. 日本運動器看護学会誌. 13. 61-67. 2018.
8. 野地有子, 野崎章子, 近藤麻理, 飯島佐知子, 小寺さやか, 溝部昌子, 金一東, 中山健夫, 宮坂勝之, 菅原浩幸: 2017 キックオフ国際シンポジウム診療ガイドラインの軌跡と未来形, “why and how” of trustworthy clinical practice guidelines, 1-16, 2017.
9. 望月由紀, 野地有子: 文化ケアモデルの変遷にみるカルチュラル・セーフティ・ケアの要点〜共感性を手がかりに, 日本健康科学学会誌, 33(4), 245-254, 2017.
10. 野地有子, 野崎章子, 近藤麻理, 飯島佐知子, 小寺さやか, 溝部昌子, 金一東, 中山健夫, 宮坂勝之・菅原浩幸, 山口直人: 看護実践における CPG (Clinical Practice Guidelines) の開発と位置づけ-2017 キックオフ国際シンポジウム「診療ガイドラインの軌跡と未来形」-, 千大看紀要 (40) , 55-60, 2017.
11. 野地有子, 岡田忍, 中村伸枝, 宮崎美砂子, 正木治恵, Heeseung Choi, JuYoung Yoon, Kim Sungjae, JaHyun Kang, Pakvilai Srisaeng Sauwamas Khunlan Theunnadee: グローバル人材育成を推進するアジア圏における教育研究プラットフォームの構築-学術交流協定校3大学による国際シンポジウムの共同開催, 千大看紀要 (40) , 67-71, 2017.

## 教育活動（学外）

1. 平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月 和住淑子
  - ① 派遣先：千葉県救急医療センター
  - ② 目的：看護研究個別指導・発表会指導
2. 平成 29 年 4 月 10,17 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：千葉県保健医療大学
  - ② 目的：看護キャリア発達論 非常勤講師
3. 平成 29 年 4 月～10 月 黒田久美子
  - ① 派遣先：文部科学省
  - ② 目的：看護学教育モデルコアカリキュラム策定ワーキンググループ
4. 平成 29 年 4 月 20 日,5 月 11 日,5 月 18 日 和住淑子
  - ① 派遣先：東邦大学看護学部
  - ② 目的：基礎看護学 I（看護理論）特別講義」講師
5. 平成 29 年 5 月 9 日, 10 月 1 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：東京都看護協会
  - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル教育課程「看護サービス提供論」講師
6. 平成 29 年 5 月 23 日 和住淑子
  - ① 派遣先：東京都看護協会
  - ② 目的：ファーストレベル研修講師（「看護専門職論」担当）
7. 平成 29 年 6 月 6 日 錢 淑君
  - ① 派遣先：東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科
  - ② 目的：「アジア諸国の看護・看護教育の現状」非常勤講師
8. 平成 29 年 6 月 20～24 日 黒田久美子
  - ① 派遣先：中国医科大学附属第一医院（中国 瀋陽）
  - ② 目的：アジア開発銀行老人看護プロジェクト 講義「研修立案の理論と技法」
9. 平成 29 年 6 月 24,25 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：愛媛県看護協会
  - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル教育課程「看護管理概論」講師
10. 平成 29 年 6 月 29 日 和住淑子
  - ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院
  - ② 目的：「シニアプリセプター実践研修」講義「課題解決のために必要な能力—事例の問題の構造的把握のために必要なシニアプリセプターとしての視点—」, グループワークファシリテーター
11. 平成 29 年 6 月 29 日 黒田久美子
  - ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院黒田久美子
  - ② 目的：シニアプリセプター実践研修 グループファシリテーター

12. 平成 29 年 7 月 1,2 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：宮城大学大学院看護学研究科博士前期課程
  - ② 目的：看護教育学 非常勤講師
13. 平成 29 年 7 月 29 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：静岡県看護協会
  - ② 目的：認定看護管理者研修ファーストレベル「看護専門職論」講師
14. 平成 29 年 8 月 5 日 和住淑子
  - ① 派遣先：岐阜県立看護大学大学院看護学専攻
  - ② 目的：「看護政策論」非常勤講師
15. 平成 29 年 8 月 7 日 和住淑子
  - ① 派遣先：埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修
  - ② 目的：「看護理論」非常勤講師
16. 平成 29 年 8 月 8 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：獨協医科大学
  - ② 目的：看護学部実習指導者研修会 講師
17. 平成 29 年 8 月 12 日 和住淑子
  - ① 派遣先：能美市立病院
  - ② 目的：看護管理者研修 講師
18. 平成 29 年 9 月 8～9 日 和住淑子
  - ① 派遣先：大阪府看護協会
  - ② 目的：「新人看護職員研修責任者研修」講師
19. 平成 29 年 9 月 8～9 日 黒田久美子
  - ① 派遣先：大阪府看護協会
  - ② 目的：新人看護職員研修責任者研修 講師
20. 平成 29 年 9 月 11 日 吉田澄恵
  - ① 派遣先：防衛医科大学校
  - ② 目的：看護学科 2 年 成人看護援助論①「急性期にある患者・家族の看護（運動器疾患）特別講義
21. 平成 29 年 9 月 16 日 和住淑子
  - ① 派遣先：埼玉県立大学
  - ② 目的：「教育責任者の中長期育成支援プログラム」講師
22. 平成 29 年 9 月 19 日 和住淑子
  - ① 派遣先：東京慈恵会医科大学病院看護部
  - ② 目的：「指導力強化研修Ⅱ」講師
23. 平成 29 年 10 月 5 日、12 日 和住淑子
  - ① 派遣先：千葉県看護協会
  - ② 目的：平成 29 年度「実習指導者講習会（40 日コース）」実習指導の原理 講師

24. 平成 29 年 10 月 6 日、16 日 黒田久美子  
① 派遣先：千葉県看護協会  
② 目的：平成 29 年度「実習指導者講習会（40 日コース）」実習指導の原理 講師
25. 平成 29 年 11 月 3 日 黒田久美子  
① 派遣先：千葉県糖尿病看護研究会（千葉市 京葉銀行プラザ）  
② 目的：第 18 回千葉県糖尿病看護研究会「糖尿病をもつ人の在宅医療を支えるチーム医療」 グループワークファシリテーター
26. 平成 29 年 11 月 12 日 黒田久美子  
① 派遣先：千葉県糖尿病協会（市原市市民会館）  
② 目的：第 14 回市民のための糖尿病教室—これからの社会、みんなで支える糖尿病 講演座長、実行委員
27. 平成 29 年 11 月 13,20 日 吉田澄恵  
① 派遣先：千葉県看護協会  
② 目的：認定看護管理者教育課程セカンドレベル「人的資源活用論」講師
28. 平成 29 年 11 月 20 日 和住淑子  
① 派遣先：千葉県立保健医療大学看護学科  
② 目的：「看護政策論」非常勤講師
29. 平成 29 年 11 月 21 日 和住淑子  
① 派遣先：東京都看護協会  
② 目的：ファーストレベル研修講師（「看護専門職論」担当）
30. 平成 29 年 11 月 22 日 和住淑子  
① 派遣先：千葉大学医学部附属病院  
② 目的：「シニアプリセプター実践研修」グループワークファシリテーター
31. 平成 29 年 11 月 22 日 黒田久美子  
① 派遣先：千葉大学医学部附属病院  
② 目的：シニアプリセプター実践研修  
講義「教育支援における評価」講師 グループファシリテーター
32. 平成 29 年 11 月 23 日 吉田澄恵  
① 派遣先：長野県看護連盟南信州地区研修  
② 目的：「看護を提供するためのシステムを読み解く — “本物の看護” を手放さないために」講師
33. 平成 29 年 11 月 28 日 黒田久美子  
① 派遣先：神戸市看護大学  
② 目的：FD 研修「看護学教育における FD マザーマップの活用～効果的で計画的な FD の在り方の検討に向けて」講師

34. 平成 29 年 12 月 4 日 和住淑子
- ① 派遣先：学校法人慈恵大学
  - ② 目的：平成 29 年度看護監督者研修「看護管理に必要な知識体系」講師
35. 平成 29 年 12 月 30 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：第 13 回富山透析看護研究会
  - ② 目的：「研究と倫理と看護の関係を考える～日常のもやもやした出来事と看護学の関係～」講師
36. 平成 30 年 1 月 19 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉県看護協会
  - ② 目的：第 3 回看護研修会（看護連盟との合同研修）「管理者に必要なヘルスコミュニケーション・コンサルテーションのあり方」講師
37. 平成 30 年 1 月 22 日 野地 有子
- ① 派遣先：金城大学看護学部（石川県）
  - ② 目的：「これからの看護を問う～地域包括ケアが問われているいま～金城大学・白山市パートナーシップ事業（やまの保健室事業）」講師
38. 平成 30 年 2 月 5 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：宮崎県
  - ② 目的：平成 29 年度公衆衛生実習指導者研修「臨地実習の意義と実習指導の基本的理解」講師
39. 平成 30 年 3 月 5 日 吉田澄恵
- ① 派遣先：岩手保健医療大学
  - ② 目的：平成 29 年度第 6 回 FD 研修会「FD マザーマップ®の看護学教育の継続的質改善(CQI)への活用の可能性」講師
40. 平成 30 年 3 月 9 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院
  - ② 目的：臨地実習指導者研修 グループファシリテーター

## 2. 職員配置

### 附属看護実践研究指導センター

研究部	職名	氏名
センター長	教授	吉本 照子
ケア開発研究部	教授 准教授 講師	野地 有子 黒田 久美子 赤沼 智子
政策・教育開発研究部	教授 准教授	和住 淑子 銭 淑君

### 大学院看護学研究科看護システム管理学

領域	職名	氏名
病院看護システム管理学	教授 講師	手島 恵 飯田 貴映子
地域看護システム管理学	教授 准教授	吉本 照子 杉田 由加里
ケア施設看護システム管理学	教授	酒井 郁子

### 外部資金等

名称	職名	氏名
看護学教育 CQI モデル開発と活用推進	特任准教授	吉田 澄恵

### 3. 看護実践研究指導センター運営協議会記録

#### 運営協議会委員名簿

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (看護学研究科長)	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
3号委員	諏訪 さゆり	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
4号委員	市川 智彦	千葉大学大学院医学研究院教授
	後藤 友美	厚生労働省医政局看護課課長補佐
	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	小宮山 伴与志	千葉大学教育学部長
	佐藤 美穂子	日本訪問看護財団常任理事
	武田 淳子	宮城大学看護学研究科教授
	高田 早苗	日本赤十字看護大学長

平成30年2月27日現在

## 第37回看護実践研究指導センター運営協議会

1. 日 時 平成29年2月20日(火) 17時30分～19時15分
2. 場 所 千葉大学看護学部 大会議室
3. 出席委員 中村会長(看護学研究科長)、吉本委員(看護学研究科附属看護実践研究指導センター長)、諏訪委員、手島委員、野地委員、和住委員、後藤委員、小見山委員、小宮山委員、佐藤委員、武田委員  
オブザーバー 吉田澄恵
4. 議 題
  - (1) 平成30年度センター事業計画(案)について
    - I. 研修事業
      - ① 国公立大学病院副看護部長研修(センター独自事業)
      - ② 看護学教育指導者研修ベーシックコース(センター独自事業)
      - ③ 看護系大学FD企画者研修(センター独自事業)
      - ④ 看護管理者研修ベーシックコース(委託事業)
      - ⑤ 看護学教育ワークショップ(センター独自事業)
    - II. 事業・プロジェクト
      - ① 看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement:CQI)モデルの開発と活用推進
    - III. 研究活動
      - ① 共同研究
    - IV. FD・SDの推進
      - ① FDコンテンツ開発(国際交流・海外研修の危機管理 他)
      - ② FD(Faculty Development)マザーマップ®の活用を含む個別FDコンサルテーション
      - ③ CQI関連情報の共有とネットワーク化促進のためのWebシステムの整備
    - V. 広報活動  
情報発信
      - ① 活動内容掲載(HP)
      - ② 拠点インフォメーションメール
      - ③ センターパンフレット
      - ④ センター年報
      - ⑤ ニュースレター

## 5. 報告事項

### (1) 平成29年度センター事業について

#### I. 研修事業

- ① 国公立大学病院副看護部長研修（センター独自事業）
- ② 看護学教育指導者研修ベーシックコース（センター独自事業）
- ③ 看護系大学FD企画者研修（センター独自事業）
- ④ 看護管理者研修ベーシックコース（委託事業）
- ⑤ 看護学教育ワークショップ（センター独自事業）

#### II. 事業・プロジェクト

- ① 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement:CQI）モデルの開発と活用促進
- ② 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業

#### III. 研究活動

- ① 共同研究

#### IV. FD・SDの推進

- ① FDコンテンツ開発（国際交流・海外研修の危機管理 他）
- ② FD（Faculty Development）マザーマップ®の活用を含む個別FDコンサルテーション
- ③ CQI関連情報の共有とネットワーク化促進のためのWebシステムの整備

#### V. 広報活動

##### 情報発信

- ① 活動内容掲載（HP）
- ② 拠点インフォメーションメール
- ③ センターパンフレット
- ④ センター年報
- ⑤ ニュースレター

#### 4. 看護実践研究指導センター運営委員会記録

運営委員会委員名簿（平成29年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	吉本 照子	看護実践研究指導センター長 教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
2号委員	野地 有子	教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	和住 淑子	教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	黒田 久美子	准教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	錢 淑君	准教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	赤沼 智子	講師 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
3号委員	手島 恵	教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	酒井 郁子	教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	杉田 由加里	准教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	飯田 貴映子	講師 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
4号委員	諏訪 さゆり	教授 (大学院看護学研究科看護学専攻)

看護実践研究指導センター運営委員会（平成29年度実施分）

年月日 平成29年4月12日（水） 16:20～17:30

- 議題等
1. 平成29年度副看護部長研修応募者採否について
  2. 平成29年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）受講者の推薦について
  3. 平成29年度国公立大学病院看護管理者研修（ベーシックコース）受講者の推薦について
  4. 平成29年度看護系大学FD企画者研修の募集について
  5. 平成29年度共同研究員の採否について
  6. 平成28年度決算報告・平成29年度予算について

年月日 平成29年5月2日（火）～5月8日（月）

- 議題等
1. 平成29年度認定看護師教育課程（乳がん看護）研修生選抜試験の合否判定（案）について

年月日 平成29年5月17日（水） 16:20～17:40

- 議題等
1. 平成29年度年間予定について
  2. 平成29年度看護学教育ワークショップ実施要項（案）
  3. 看護実践研究指導センター運営協議会委員候補について

年月日 平成29年6月14日（水） 16:20～17:10

- 議題等
1. 平成29年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）の受講者の選考について
  2. 平成29年度管理者研修（ベーシックコース）の受講者の選考について
  3. 平成29年度看護系大学FD企画者研修受講者の選考について

年月日 平成29年7月19日（水） 16:24～16:37

- 議題等
1. 平成29年度看護管理者研修（ベーシックコース）のプログラムについて
  2. 平成29年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）のプログラムについて
  3. 平成29年度看護系大学FD企画者研修Ⅰの実施について

年月日 平成29年8月24日（木）～8月28日（月）持ち回り審議

- 議題等
1. 平成29年度看護学教育ワークショップの参加者決定について

年月日 平成29年度11月15日（水）～11月20日（月）持ち回り審議

- 議題等
1. 看護実践研究指導センター運営協議会委員の選出について

年月日 平成30年1月17日（水） 16:20～17:05

議題等 1. 平成30年度附属看護実践研究指導センター事業計画（案）について

年月日 2. 平成30年度共同研究の募集について

3. 平成30年度国公立大学病院副看護部長研修について

4. 特任助教の公募について

年月日 平成30年2月23日（金）メール審議

議題等 1. 看護実践研究指導センター運営協議会委員の名簿について

## 5. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程

平成16年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則第16条に定める千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（以下「センター」という。）の管理運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、教育関係共同利用拠点として、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学法人の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものの利用に供することを目的とする。

(研究部)

第3条 センターに、次の研究部を置く。

- 一 ケア開発研究部
- 二 政策・教育開発研究部

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授、准教授、講師、助教、助手及びその他の職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの管理運営に関する業務を総括する。

- 2 センター長の選考は、看護学研究科の専任の教授の中から研究科長の推薦により学長が行う。
- 3 センター長の任期は2年とし、1回を限度として再任することができる。

(運営協議会)

第6条 センターに、センターの事業計画その他運営に関する重要事項を審議するため、センター運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第7条 協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 看護学研究科長
- 二 センター長

三 看護学研究科教授会（以下「教授会」という。）構成員の中から研究科長が選出した者若干名

四 看護学研究科外の学識経験者若干名

2 前項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 第1項第4号の委員は、看護学研究科長の推薦により学長が選考し、委嘱する。

（会長）

第8条 協議会に会長を置き、看護学研究科長をもって充てる。

2 会長は、協議会を召集し、その議長となる。

（運営委員会）

第9条 センターに、次の事項を審議するため運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

一 センターの事業計画に関すること。

二 センターの予算の基本に関すること。

三 その他センターの管理運営に関すること。

（組織）

第10条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

一 センター長

二 センター所属の教授、准教授及び講師

三 看護システム管理学専攻専任の教員

四 教授会構成員（前2号に掲げる者を除く。）の中から研究科長が選出した者3名

（委員長）

第11条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

（会議）

第12条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

2 委員会の議決は、出席委員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長の決すところによる。

3 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させることができる。

（共同研究員）

第13条 センターは、国立大学法人の教員その他の者で看護学の実践的分野に関する調査研究に従事するものを共同研究員として受け入れることができる。

2 共同研究員に関し必要な事項は、別に定める。

(研修)

第14条 センターは、必要に応じ看護教員及び看護職員の指導的立場にある者に対し研修を行うものとする。

2 研修に関し必要な事項は、別に定める。

(事務処理)

第15条 センターの事務は、看護学部事務部において処理する。

(細則)

第16条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、研究科長が定める。

附 則

1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際国立大学法人法（平成15年法律第112号）附則別表第1の上欄に掲げる千葉大学（以下「旧千葉大学」という。）において定められた千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧千葉大学において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成21年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程（以下「旧規程」という。）第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧規程において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

## 千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター

〒260-8672

千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL 043-226-2464

URL <https://www.n.chiba-u.jp/center/>